
バカとテストとZクラス

ソウルメイジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストとZクラス

【Nコード】

N0438W

【作者名】

ソウルメイジ

【あらすじ】

2年生になり振り分け試験の結果をもらう明久。しかしそこで待っていた結果とは、謎のクラスであるZクラスという存在だった。このクラスは、すべてが謎に包まれている何とも怪奇なクラス。そのクラスにいった明久を待っていたものそしてそのクラスで行われていることとはいったい・・・

新キャラクターも登場させるちよつとオリジナル作品

島田×明久でやっていこうと思っているので

それが苦手だという方はこの小説を読むといらつと来ちゃうかもし

れません

初めての作品になるのでへたくそかもしれませんが頑張りますっ！

僕と謎のZクラス（前書き）

2次創作というものは、初めてなので原作とかぶりすぎているかもしれないですが

暖かい眼で見てやってください

こうやったら面白いんじゃないのといったものは随時お待ちしておりますので

よろしく願いします

僕と謎のZクラス

「やばい・・・完全に遅刻だ」

僕は、猛ダツシユで文月学園へと向かっていた。

まさか、カレンダーが去年のだったとは思わなかった

これこそ盲点つてやつだね

それにしても、2年目早々遅刻だなんていやだな

————文月学園————

「遅いぞ、吉井」

玄関の前でドスのきいた声で僕は呼び止められる

声のした方を見ていると、肌の黒い筋骨隆々の男がたっていた

「げっ鉄人・・・」

しまった、急に現れたもんだから鉄人と呼んでしまった

「鉄人じゃない、西村先生だ」

この鉄人というのは、生徒の間での西村先生のあだ名だ。

趣味がトライアスロンであることからつけられたのだ。その上生徒指導の鬼

というところからも来ているそうだ

「それより、西村先生なんでこんなところにいるんですか？」

僕、もう30分は軽く遅刻していると思うんですが……」

「自覚しているなら、早く来いバカが」

俺がお前を待っていたのはこれを渡すためだからだ」

そういつて、僕に一つの封筒を渡してくる

その封筒には、大きく吉井明久様と書いてあった

「ありがとうございます」

と形だけの礼をいい頭を下げながら受け取る

「それにしても、なんで生徒1人1人に手渡しにするんですか、めんどろですよ」

そついいながら、僕は丁寧に封筒の封を解いていく

「うちの学校は、最先端システムの導入により世界から注目を浴びている

これもまた、注目されるよう学園長の手回しだそうだ」

「へえ」

僕にはもうそんなことはどうでも良かった

この封筒の中には、1年の末にした振り分け試験の結果が入っているのだ

これの結果で、成績順にA〜Fクラスまで分けられAクラスなら設備が充実して

Fクラスなら、ボロボロの教室で勉強しなければならないのだ

この前の振り分け試験は手ごたえがあつたからな

Cクラスくらいだったりして

「吉井、今だからいうがな」

「はい、なんでしょう」

「俺は去年1年間お前をみてきて、お前はバカなんじゃないかと思つていた」

なかなか、粘着力があるなこの両面テープ

「ハハハ、そんなわけないじゃないですか」

自慢じゃないが、この前のテストはかなり取れたと思う。

僕の相棒の鉛筆ストライカーシグマ？とプロブレムブレイカーの振り応えは確かにあつた

「そうだな、お前のその姿を見ていて、俺は安心した」

くそ、なかなか開かないな

もういいや、破ってしまえ

ピリッと嫌な音が響いたがどうやら中の紙に支障はないようだ

ふう、危ない危ない

「これから頑張れよ、吉井」

何だか鉄人にそんな事を言われると何だかむずがゆい。

なんで鉄人はこんな僕に優しい言葉を言うのだろうか

「気持ち悪いですよ」

「なんとも言え、一つ忠告しといてやる」

今日の鉄人は、何だか妙だ

いつもなら、鉄人といっただけで鉄拳制裁を加えるところを何もしなかったり

僕に投げかける言葉にもとげがない、優しいおじさんみたいな感じだった

「死ぬなよ」

そういうと、鉄人は教室のほうへ去って行ってしまった

死ぬなよってどういう意味っ!?

「ちょっと・・・」

引き留めようとしたときにもう鉄人の姿はなかった

そうして、僕は恐る恐る自分のクラスを確認する

「吉井明久 Zクラス」

それが、僕の文月学園の謎のクラスであるZクラスでの新しい日々の幕開けとなった?

僕と謎のZクラス（後書き）

どうでしたか？

楽しんでいただけたでしょうか、これからがんばりますんで
よろしくお願いします

僕とクラスの見回りと（前書き）

これから、自分のオリジナルっぽくなりますので
グダるかもしれませんが、頑張るのでよろしく

僕とクラスの見回りと

「Zクラスってなんだよ」

僕はこんなクラスこの学校に入ってきてから一度も聞いたことがない

この文月学園はA～Fにランクわけされているはず・・・

そういいながら、封筒の中に入っていた地図を見ながら

謎に包まれたZクラスに向かう・・・

その前に、他のクラスの設備でも見ていこうじゃないか

————文月学園3階2年生教室————

「なんだろう、このでかい教室は・・・」

そうして、去年まで入ったことのなかった3階に入ると一番に目に
入ったのは

普通の学校にある教室の5倍はあるだろうと思える教室だった

あまりのすごさに興味本位で中をのぞいてみると

教室の前にあるのは、黒板ではなく巨大プラズマディスプレイ

そのうえ、生徒の机の上には、ノートパソコンに冷蔵庫、そして個

人エアコン

そして、座っている椅子は、あの買った苦しい木の椅子ではなくリクライニングシートだった。

これが、あの豪華絢爛で、この学年のトップたちが集まるAクラスか・・・

そうして、まっすぐ行くに途中B、Cクラスがあった。

でも、どのクラスも普通のクラス以上の設備でとっても羨ましいなのに

「なんで、僕はZなんだよ」

まあZクラスのことをあまり知らないから、なんとも言えないのだが

鉄人のあの反応といい、とても優雅な学園生活を送れるような場所だとも思えない

といっている間に旧校舎にあるDクラスに到着した

Dクラスは、まあ去年使っていたような設備で、普通に机とロッカーと椅子があった

さて、問題はここからだ・・・

Dクラスで、この設備ということはE、Fクラスはふつつ以下だということになる

Eクラスを覗いてみるとそこには、木の机、木の椅子、木のロッカーといった昭和の教室を思い出させる

ような、クラス背景だった。

そうして、Fクラスにむかう途中で・・・

「よう、明久」

そういつて、僕に声をかけてきたのは、身長180センチくらいの野性味たっぷりの男で

僕の悪友である雄二とだった。ということはこいつはFクラスなわけだ

「なんで、雄二外に出ているの、今は授業中のはずだよ」

「教師が来たときに、チョークがなかったのと、教卓がつぶれてしまったから今は自習なんだ」

教卓がつぶれた、チョークがないなんてことだFクラスはそんなにひどい設備なのか

そして、僕のかうクラスはあろうことかアルファベット最後の文字であるZだ

Fなんか比にならないくらいひどい設備なんだろう

こりゃ、もしかすると青空教室なんてことも覚悟しなくちゃならな

いかもね

「明久、早く来いよ。お前もどうせFなんだろ」

失礼なやつめ、最初^{はな}から僕はFクラスと確定してるように言いやが
って

「そんなわけないじゃない、僕はFクラスなんかじゃないよ」

「なにっ、まさか・・・」

雄二も、僕の発言にかなり驚いているみたいだ

まあ、すぐにこいつの安心する結果になるんだろうけどなんか癪な
のでしばらく

僕から、答えを言うのはひかえる

「おまえ。Eクラスなのか」

「いいや、違うね」

「ならDか」

「そんなわけないじゃない」

「C」

「雄二は、僕のことをなんにもわかってないね」

まったく、僕がそんなところにいけるわけじゃないか

「おまえまさか、Aなのか・・・」

「それも、違うね」

残念ながら・・・

「じゃあ残るは、Bか・・・やるなあ」

僕のことを関心している雄二

僕も、その結果だったらよかったのに

「実は、Bでもないんだ・・・」

「なにっ！いま俺は全クラスのアルフアベツトを言ったぞ、お前、嘘をついているのか」

ってことは雄二もZクラス存在を知らないわけか・・・

まあいいやそろそろネタ晴らしといこうじゃないか

「実は僕・・・」

「あ、わりい明久その話はあとで、教師が戻ってきやがった」

そういつて雄二は、薄汚い教室へと戻っていく

さてと、じゃあ僕も向かうとするか・・・

――――文月学園地下クラス――

「ここがZクラスかあ」

なんだか、格闘場みたいなところだな

「よく来たさね、ようこそ文月学園裏の門Zクラスへ」

僕とクラスの見回りと（後書き）

ふう、やはりぐちゃぐちゃになってしまいましたかね
どういう、内容かついていけていただけると幸いです

あと、行と行の間に空白がほしいということがあれば言うてください
次回からはそうしますので

では・・・また次回お会いしましょう

僕とクラスと新事実

「が、学園長!？」

どうして、学園長がこんなところに

いつもなら、召喚獣のメンテナンスばかりやっているバリバリの研究者だって聞いていたけど・・・

「ほう、お前は私が学園長だとわかるのかい、少し見なおしたよ」

僕をどこまでバカだと思っているんだ

「なめないで下さいよ、僕だって写真に乗っていた人の顔くらい覚えれますよ」

「そいつはすまなかったねえ、何でもお前は、特別バカだと西村先生から教えられていたものだから」

鉄人か・・・学園長になんてこと吹き込んでくれやがる

それで、僕の評判がわるくなったらどうしてくれるんだ。僕は、こんなにもまじめだというのに

「学園長、その考えは今すぐあらためてください。」

「そいつは無理さねえ」

「なんでえ」

それは、あんまりだ。

「現に目の前にいるお前さんが西村先生の言った通りのやつだからさよ」

鉄人め、この人にいたいどんな説明をしゃがったんだ

「それで、このZクラスっていうのはいったいなんなんですか」

「簡単に言えば実験場さね」

「どういう意味ですか」

「性格に言えば、この学園全体が実験場なんだけどね。そもそも、試験召喚システムについて

お前さんは疑問を持ったことはないのかい」

僕は、その言葉で1年生の時に行った試験召喚獣の試運転のことを思い出す

—————1年前—————

「では、これより試験召喚獣の試運転を始める。名前を呼ばれたものは来るように・・・」

そういつて、次々とステージの上で試獣召喚サモンといった後、皆は、

すごく喜んだ顔をしてワーキヤーと騒いだあとにステージから降り

てきていた

そしてステージの周りでも、試獣召喚サモンと言った後には歓声にあふれかえっていた

が、僕には何のことだかさっぱりわからなかった

だってそこには、何もないのだから……

あの何にも興味示さないような雄二でさえ、それを言った直後には、笑みを隠さずにはいらなかったのだ。

そんな、面白そうなものが僕にだけ見えないのは不公平だ

そう怒っていると

「では次、吉井明久」

僕も順番がきて呼び出された。

このステージに上ったら、何かが起こる仕様なのかもしれない

そういう期待をこめて、僕は先生のいるステージへと昇っていく

「では、呼び出してください」

そういわれて、皆のやっていた通り、試獣召喚サモンと言っのだが

結局、僕の周りに何かが起こることはなかった

僕とクラスと新事実（後書き）

改行を一応してみました

どうでしょうか、楽しんでいただけたでしょうか

また感想お待ちしております

では、また次回

僕と過去と召喚獣（前書き）

すこし、自分だけのオリジナルが強くなってきたため
文章がぐだぐだになっているかもしれない

僕と過去と召喚獣

しかし、皆は僕が試獣^{サモン}召喚と言ったとたんに

「明久に似たバカな召喚獣だな」

「ほんと、間抜け面なんてそっくりだ」

などと言って僕の前にかがんでなにかワイワイしている

まるで、そこには何かがいるかのようにしていたのだ

僕は、なんのことだかよくわからなかったので雄二に聞いてみた。

「ねえ、雄二」

「なんだ、明久」

「雄二には、何か見えているの？」

「どういう意味だ」

「だから皆、試獣^{サモン}召喚って言ったあとキヤーキヤー騒いでいるですよ。

あれってなんでなのかなあ～と思って」

「どうもなにも、あのステージの上には教師用フィールドが展開されていてあの上で

試獣召喚サモンというと、自分の姿がデフォルメされた小さな召喚獣がで
てくるんだ、入学式の時に説明を
受けただろうが。もう忘れたのか」

そう、これこそがこの文月学園が世界から注目を集めている最先端
技術である試験召喚システムだ。

このシステムは、テストの点数に応じた召喚獣を呼び出して戦うこ
とのできるシステムで

教師の立ちあいの下で可能となる

そして、この召喚獣の強さになるのが、時間内問題数無制限点数の
上限なしでおこなわれる

テストの点数となるわけだ。これによって

学力低下が嘆かれる昨今、生徒たちの勉強に対するモチベーション
アップのためのシステムなんだ。

これを目当てにここを受験する人も少なくはない

まあ僕は場所が近いことと、進学校故の学費の安さなんだけど・・・

そんな事は、忘れてなんかいない。かなり驚いたからね。よく頭に
残っている。

しかし、問題はその召喚獣が、僕には全く見えないってところなんだ

「雄二には、その召喚獣が見えてるの？」

「ああ当然だ。それにしてもなんでそんな事を聞くんだ？お前にも見えているだろ」

「どうやら、僕にだけ見えないらしい。」

雄二たちには、その召喚獣が見えているんだ。

その後も、何度か召喚獣の試運転が行われたが僕には全く見えないまま時間が過ぎて行った

僕と過去と召喚獣（後書き）

どうでしょうか、お楽しみいただけたでしょうか

また、感想、意見などお待ちしておりますのでよろしく願いします
では、また次回

僕とZクラスの仲間たち

「……………現在文月学園地下……………」

「もう一度きくよ、お前さんはこの試験召喚システムについて疑問を持ったことはないのかい」

学園長は冷たい表情で、もう一度同じ疑問を僕に投げかけてくる

「僕は、今まで一度も召喚獣を見たことはありません」

去年一年間に数回行われた召喚獣の試運転。

しかし僕は、その試運転で一度として召喚獣の姿を見ることはなかった。

「それだけかい？・・・」

学園長は、何かを待っているかのような言いぐさだった。

「僕にも、さっきの言葉の意味を説明してもらえませんか」

そういったとたん、学園長の顔はさっきの張り詰めた顔とは一転とも明るいものへと変化した

「ようやくかい、まったく時間のかかるガキだ。」

なんか急に態度がでかくなった気がする。

っていうか、なんでその疑問を待っていたんだよ。意味が分からない

「それじゃ、説明するからZクラスに入っておくれ」

そういつて、指をさしたのは目の前にある外見はどう見ても格闘場にしか見えない

場所だった。

「学園長、あの格闘場らしきものが、Zクラスなんですか？」

「それ以外にどこがあるっていうんだい」

それ以外って、ここは仮にも学校だ。そのクラスというのが格闘場というのはちょっとおかしい気がする

「なんで、格闘場なんですか」

「あれは、あたしの趣味さ」

「どんなしゅみだよ」

思わず突っ込みを入れてしまったよ。まったく・・・

「とにかく入りな」

僕は、学園長に促されるままに格闘場へと入っていく

「うわぁ」

そこで見たのは、Aクラス並みの広い部屋。そして外見からは考えられなかったようなまぎれもない教室だった

一つ一つの机には、Aクラス同様、個人用エアコンや冷蔵庫、ノートパソコンの支給まで施されていた

そして、そこに座っていたのは・・・

「おゝ、明久じゃねーかなんてお前までこんなところにいるんだよ」
なんとFクラスだったはずの悪友坂本雄二の姿であった

「雄二、なんでこんなところにいるの？」

「それはこっちのセリフだ。なんでお前みたいなバカがこんなところにいる」

失礼な奴め！

「僕のどこがバカだっていうんだ。それに雄二は確かFクラスだったはずだよ」

学力の最低ランククラスの奴になんか言われたくないね」

「なんだ、やろってのか」

「あゝ、やってやろうじゃないか」

「ほらほら、坂本君に吉井君。もうそその辺にしときなよ」

あれ？この人は誰だろう。

多分、男の子なんだろうけど少し小さめの身長につぶらな瞳、肩まである

ストレートのサラサラの髪、どこをどう見ても女の子にしか見えない

これは、去年同じクラスだった自分を男だと言い張る美少女秀吉と
いい勝負だよ

こんな印象的な人、僕の知っている限り

この学園じゃ、見たことないと思うんだけど・・・

雄二も困った顔をしている

「ねえ、君は誰？」

僕は、その男の子に率直な疑問を述べてみる

「あつごめん、ついアメリカにいた時のクセが・・・

ぼくはつい最近アメリカから帰国した、ハーバード大学卒業生の黒
宮隼っていうんだ

よく間違われるんだけど、ぼく、男だからね・・・」

そんな上目使いで言われるとますます女の子にしか見えない。

これは、相当な苦勞をしてきたに違いない。今度秀吉に合わせてあ
げよう

きつと意見が合うはずだ。

「ハーバード大学だっ！」

そういったとたん隣で急に声を上げる雄二。

その、すつとんきょうな間抜け面に思わず笑いそうになったが

僕はその笑いをかみ殺してその大声の原因を聞くことにした

「どうしたの、雄二。そんな大声あげて」

「どうしたも何もあの有名なハーバード大学の卒業生・・・ってことはお前今何歳なんだ」

なんで、歳を聞くんだよっ！もっと他に聞くことはないのかよ

それに、ハーバード大学と言えば、姉さんが行ってた大学と同じような・・・

「君たちと同じだよ」

「・・・・・・・・」

「「なんだっ」」

そんな、バカな。僕たちと同じ歳で大学を卒業だと・・・

姉さんでさえもう24歳だというのに、この雫君、何者なんだろう

「盛り上がっているところ悪いんだけどね、そろそろはじめさせてもらってもいいかい」

そう言って学園長は、あきれた顔で僕たちにそう言った

僕とZクラスの仲間たち（後書き）

玲さんの年齢については、勝手に決めてしまいました

玲ファンの方すいません

それにしても、雄二がいてくれるだけでこれだけスラスラかけるとは正直自分でも、驚きです

また、感想やご意見お待ちしております

僕とZクラスと自己紹介（前書き）

もう、これバカテスっぽく無いなって自分で思い始めました
なんか、暗いし・・・
もうちょっと明るくできるよう努力します

僕とZクラスと自己紹介

「さっさと自分の席につきな、ガキども」

そういつて、前の教卓に座る学園長。教卓に座るなんて、あんたそれでも教師かつ！

それに、最初に出会った時より態度がえらそうだ。これが、この学園長が本性ってわけか・・・

そう思いながら、僕は雄二と雫君と別れて自分の席に着こうと席を探す。

僕は席を探すため、ぐるーっと教室を目で一周する

すると、雫君は席に着いたのだが、逆に雄二はさっき座っていた席をたって自分の席を捜し歩いている

あいつ、他人の席に座ってやがったのか

「えーっと僕の席は・・・」

辺りを見回してみるけど、僕の札の立てられた席は見当たらない

その代りに、大いに目立つちゃぶ台が2つあった。

そしてそこは、まわりと比べてその部分だけ飛び切りみすばらしく近寄りがたい雰囲気かもを醸し出していた

残り立っている生徒も僕と雄二の二人だけ

え・・・まさか

「何を、うるちよろしてるんだい、あんたたちの席はそこだよ」

そう言っで学園長は、僕の予想してた通り貧相ちゃぶ台に指をさす
いやだ、僕は認めない。まわりはみんなAクラス待遇を受けている
のに僕だけこんな席だなんて

「納得できません学園長。雄二はこのちゃぶ台で十分だとしても、
なんで僕までちゃぶ台なんですか」

「そうだ、明久にはちゃぶ台でももったいないくらいだが俺がちゃ
ぶ台というのはおかしいだろ」

「なにもおかしくなんかないさね、アンタたちは振り分け試験の時
にFクラス判定をもらっている。

だとしたらその設備で授業をうけるってのは当然ってもんさ」

そう言っで、僕たちの反論をあっさりと切る学園長

「それじゃあ、このZクラスっていうのはいったいなんなんだよ。
これも、振り分け試験で決められたクラスじゃねえのかよ」

なおも、反論を試みる雄二。

あれ？でも雄二ってはじめはFクラスにいたよね。なんで振り分け
試験で決められたクラスだっけと思っただろう

あとで聞いてみよ

「そもそもこのZクラスっていうのは、試験召喚システムの異常がわかるものだけを集めたクラスなんだよ
だから、このZクラス内でも設備はしっかり分けるっていうのが筋
つてもんだよ」

そう言われてみて、僕は辺りの机をもう一度見回して見るが僕の見
る限りではどの机にも同じ支給がされていた

「このちゃぶ台を除いては、全部同じ設備のようにみえるのですが・
・・」

「そりやそうさね、なにせこのクラスにはアンタらを除いては
全員がAクラスかそれ以上の学力を持つ生徒しかいないんだからね、
それじゃ挨拶もかねて全員

自己紹介をしてもらおうかね、そうさねえゝそれじゃあ入口側の奴
から頼むよ」

学園長の指示で、廊下側から順番にみんな自己紹介をはじめる。仕
方がないから僕たちも席に着く。

自己紹介をきいているとこのクラスにいる大半の人が文月学園の生
徒ではないらしい

その自己紹介の中で、ようやく僕の知っている人の名前が出た

「俺は霜月中出身の花咲 湊。^{ミナト}座右の銘は、いつまでも傍観者です」
この、湊君は去年同じクラスだったんだけどクラスでも結構皆とも
仲良くやってたし

、僕も何度が遊んだこともあるんだけど、

どこか謎めいていて考えの読めないやつだった。それに羨ましいほどイケメンでかつこよく

女の子からの告白もしょっちゅうだったらしい。そんな事を遊んでるときに言っていた。

まさかZクラスにいただなんて。うん、あとで殺そう・・・じゃないかったあとで声かけとこ

「 一年間よろしく」

そういつていつものごとく華麗な笑顔で占める湊。その笑顔は本当に美しく

男の僕でさえ、ほれぼれしてしまうようなものだった。

そうして、またしばらくして僕の知っている名前が耳に入った

「うちは、師走中出身の春風 渚やで。趣味とかそういうのはないけど

一年間よろしくな」

渚さんはこれまた去年の僕のクラスメイト。背中まである長い髪と凜とした目。そして何よりも関西弁

この辺では、あの子ぐらいしか関西弁は使わないだろう

京都から一昨年引っ越してきたらしく、僕もこの関西弁につられてしまうときがある

そうして、とうとう僕の番が回ってきた

「吉井明久って言います。気軽にダーリンってよんでね」

「・・・・・・・・・・」

なんだ、この恐ろしいまでの沈黙は

「失礼、忘れてください」

そうして、次は雄二の番だ。

「俺は、坂本雄二だ。以上」

それだけかよ、相変わらず自分の興味の無いことには愛想のない奴
すぐ次には、雫君の番だった

「ぼくは、最近アメリカから帰ってきた黒宮 雫です。

なんか、間違われやすいようなので先に言っておくとぼくは女です

特技は嘘をつくこと。一年間よろしくね」

あれ、女？さっき僕には、男だって言っただけだったけどどういうことなんだろう

「ねえ雄二」

「なんだ、明久」

「さっき雫君って自分のこと男って言ってなかった？」

「ちゃんと最後まで自己紹介きいてたか？あいつの特技は嘘をつくこと」

つまり俺たちは、まんまとあの性悪女にだまされてたんだよ」

「え、じゃあ結局雫君って男なの、女なの？」

「さあな、あとで本人にでも確認しに行けばいいだろ」

そういったあと雄二は、そっぽを向いてしまった。恐るべし雫君

そうして、Zクラスの自己紹介は終わっていった

僕とZクラスと自己紹介（後書き）

どうでしょう、今回は大まかなキャラクター設定を話に乗せて書いたといった形です。キャラクターの説明が不十分であるとかまたご意見、ご感想がありましたら、お寄せくださいでは、また次回

僕と真実とグループ分け

2クラス全員の自己紹介が終わったところで、教卓ですっしりと構えていた学園長が

重い尻を持ち上げて立ち上がった

老人なのに無理しない方がいいんじゃないか・・・

「それじゃ、全員の自己紹介が終わったところであたしも自己紹介をしておこうかね

この中に知らない者はいないと思うが文月学園学園長、藤堂 カラ
ルだ。

学園長といっても普段はずっと研究をしている」

それじゃ、これから始めようじゃないか。作戦会議を・・・」

そう言った直後、学園長の後ろにあるプラズマディスプレイに何らかの図が現れた

その図には、三フロアに分かれたものが二つ並んでいて、

その図の中にはA～Fと書かれたものフロアごとに1つずつあった
まちがない、これは文月学園の校内図だ。そのA～Fはクラスだ
ろう。

分かれているのはたぶん新校舎と旧校舎。

そしてその図には、何かの印と思われる赤丸が書き込まれていた。

「それじゃ、これから話すことは大半の者が知っていることだが、数名知らない者がこの中にいるため

もう一度説明しなすよ」

えっ、もうみんな知っているのこのクラスのこと。

いや、数名って言ってたしな。多分雄二は知らないだろう、さっきまでFクラスにいたっていうのもそうだし

何より、こいつも僕が、僕以上に頭が悪い

「おい明久、俺の顔見ながら何考えてんだ、話に集中しろ」

おっとそうだった。いけない、いけない

そうして、意識をもう一度学園長の方へもどす

「それじゃ、説明を始めるよ。単刀直入に言つとこの学園で取り入れられている試験召喚システム

というのは存在しないましてや、召喚獣なんて言つのはもともと存在しないんだよ」

ふんそうなんだ。試験召喚システムなんてものはやっぱり存在しないんだ

そうだよ、僕に召喚獣は見えなかったんだもん……

って

「え~~~~~」

うそ、なんでないの試験召喚システム。そりゃ確かに僕には見えなかったかもしれないけど

確かに皆には見えていた。隣にいる雄二でさえ見えていたんだ

それが、無いっていったいどういう

「なんだい、うるさいねクソガキ」

「なんだい、じゃないですよ。試験召喚システムがないって一体どういう意味なんですか」

「それを今から説明してやろうって言うてるんだ。まったくせわしないガキだね

そんな事、いちいち口に出さないでくれ」

そういつて、学園長は説明にもどる

「いや、確かに試験召喚システムというのも、召喚獣というのも存在する。しかしそれはあくまで

アンタたちの頭の中でだけの話なんだよ。

あたしが、研究で生み出したのは科学とオカルト偶然で作り上げられたものなんかじゃない

脳に錯覚を起こさせる薬だったんだよ。

つまり、召喚獣っていうのはアンタたちが見ている錯覚にすぎないってことさね」

そう言つて、説明を一度切る学園長。年のせいなんだろうが少し疲れたみたいだ

学園長が椅子に再び腰かけたとき

「ちょっと待て、そうだとしたら何故みんなが同じ錯覚を起こすんだ？

別に錯覚を起こさせる薬っていうなら個人個人で別の錯覚を見るだろう、しかも

説明会の時試験召喚システムは妙にしっかりしたルールが組まれていたな」

そう言つて学園長のことをにらみつける雄二

さすが、自分のこととなるとやたらと頭の回転が良くなる奴だ

核心をついた質問だったのか、学園長も顔をひきつらせていた。

しかし、仕方が無いといった感じで学園長は再び話し始めた

「この薬はそのクソガキの言ったように高性能すぎるんだよ。この試験召喚システムというのを

考えたのはあたしなんだとこういえばわかるかい？」

わかるかいつていわれても、学園長がなにを言いたいのか僕にはさっぱりわからない

「つまり、錯覚する内容を自由に選べる上に集団での利用も可能というわけか」

こつちをちらちらと見ながら雄二がそう答える。

これは多分僕に意味を知らせるためにわざとしてくれているのだろう

ありがとう、雄二

「それで、その錯覚というのは誰にでも起こせるもんなのか？」

「いいや、作ったあたし以外はそんな事はできないさね。偶然でできたといっても入れた薬品名は覚えているし

それで、日々研究を積み重ねているからね」

「それで・・・」

先の言葉を促す雄二。

「ああそうさね、アンタたちはこれから二つのグループに分かれて

もらう。話はそれからさね」

そういつて、僕たちは二つのグループに分けられる

僕のいるグループにはさつき言っていた湊君ミナトそれから渚さんナギサ

それに、雄二と僕と言ったなんとも少ないメンバーだ。

そのほかのメンバー、つまり20数名は全員もう一つのグループとしてグループを分けられた

栗君？とも離れてしまった

「さて、じゃあこれからが本題だよ。」

学園長のあまりの真剣な顔に僕は息をのむ

そうして、学園長の言う作戦会議は始まった

僕と真実とグループ分け（後書き）

ふう、どうにか27日中に投稿できた

一日1投稿というのをもつとうにしていますので

（まあ夏休みの間だけになりそうですが）

どうでしょうか、大体内容はご理解いただけたでしょうか

また、わからないところなどがあれば言ってください

いつでも、ご意見、ご感想をおまちしております

では、また次回

オリジナルキャラクターの紹介

オリジナルキャラクターのみを紹介しておこうと思います

名前 黒宮 雫（Zクラス代表）

年齢 17歳

性別 女

趣味 他人をだまして楽しむ

アメリカのハーバード大学の卒業生。

少しいたづら好き原作の工藤さんとキャラが多少かぶっているが
エロの方向には、まだむいていない

召喚獣装備 巫女服 弓使い

召喚者の腕輪 狩人の腕輪

2分間召喚獣と自分の体を交換することができる

交換している時はフィードバック機能もスキャンされる

名前 花咲 湊^{ミナト}「Fクラス所属」

年齢 17歳

性別 男

座右の銘 いつまでも傍観者

実態のつかめない、謎に包まれた存在

イケメンで女子からの告白の絶えない人物

だが、昔からそういう境遇にいたため飽きてしまった

以来、誰からの告白もすべて断っている

召喚獣装備 ホストの着るような白いスーツ バラ「手裏剣作用、
目くらまし作用、ボム作用」

名前 春風 渚^{ナギサ}「Aクラス所属」

年齢 17歳

性別 女

趣味 特になし

関西弁が特徴的な女子

天然なのか毒舌なのか思ったことを口にして心の折れた者は
数知れず・・・

召喚獣装備 白衣 注射

原作と異なったクラス割り振り

姫路 瑞希 Aクラス

Zクラスの登場、登場する人物はすべてオリキャラ

以上のこと以外は原作通りのクラス、キャラクターの個性でいこう
と思います

オリジナルキャラクターの紹介（後書き）

キャラクターの説明がほしいということ意見をいただいたため作成しました。

作成しているなかでZクラスの主要キャラクターがいないことに気付いたのですが、今のところは作成できておりませんそこで、1つお願いがあります。

キャラクターの設定原案を5つほど募集いたします

こんなキャラクターを出してほしいなどがありましたら

ぜひ、お寄せください。またこのキャラとくつつけてほしいなどと言ったものも募集します。まだ決めておりませんので・・・では、お待ちしております

眠りと学園長の目的

「本題に入る前に、四人グループと別の方にはこれから話すことについては全部話したあるさね

というより、この四人以外のメンバーは、互いのメンバー確認のために呼び出されただけのようなもんだからね

まあ、さっき説明した内容を四人以外の一部で知らない奴もいたみたいだがね

それじゃ、あんたたちはもう行っていていいさね武運を祈っているよ」

そう学園長が言くと、僕たち四人を残して皆このZクラスから出て行ってしまった。

雫「君？」も、僕たちに手を振りながらこのクラスをあとにしているってしまった

皆が出て行ってしまっただけで広いこのクラスに四人+老人一名というのは少し空しかった

「それじゃ、本題に入るさね。まずはこの文月学園に起こっている異常からさね・・・

まずは、これを見ておくれ」

そう言ってプラズマディスプレイを指す学園長。

僕は、はじめから気になっていたことを聞いてみる

「その赤い丸印はなんなんですか？」

「この丸印は、生徒の眠りについた場所だよ・・・」

最近この文月学園では、生徒が深い眠りにつき起きないという事故が起きている

原因として考えられるのは、あたしの薬だけなんだけどね・・・」

そこで、言葉に詰まる学園長。苦虫を噛んだような顔をして

両手を強く握りしめていたが、やがてその手を緩め、話を再開する。

「この前、あたしのもとに脅迫文が届いたさね。その手紙には

お前の薬を少しいじらせてもらった。これから文月学園の生徒たちは皆、深い眠りに落ちることだろう。」

その眠りの世界では、あんたの作りだした試験召喚システムが機能している。

眠っている生徒の目を覚ましたければ、その眠りの中の最強Zクラスを倒すことだ。

倒せるまで、起きることは不可能だぜ。クラス分けは現在のままで行われる

Zクラスに文月学園生ではない28人の高校二年生もしくは、その

年齢の者を用意した。

こいつらは眠った者同様本当に存在する連中だ。

それから、全員そろった時点で日にちは振り分け試験からスタートする。それからあとの記憶は消えるように

なっている。なお目的も伝えないからそのつもりで

試験召喚獣を許可する教師のことだがイメージはそのままでその世界に存在するようにした。

当然、本物の教師は入れないぜ。そんなのチートレベルだからな。

それじゃあ、せいぜい頑張ってくれという内容のもだったよ。」

そう言って手紙を読み上げた学園長の口元が心なしか少し緩んだような気がした

それにしても、脅迫文を書くなんて、いったい何が目的なんだろう

僕たちみたいな高校生をゲームみたいな世界に強引に連れ込んで

しかも、ゲームの中で死んだら現実で死ぬとかゲームクリアできなかったら死ぬっていう

デスゲームというほど、ひどくもない。何をしたいのが全く読めないものだ

雄二も必死に考え込んでいるみたいだけどいまだに答えが出ない様子

「一体誰がこんなことを」

「そいつは、わからないけどもう何人もの生徒が眠っている。じきにあんたたちも眠りにつくだろうさ」

一息置くと学園長は僕たちに深々と頭を下げてきた

「頼む、生徒たちを助けてくれ」

「なんで、俺たちなんだ？」

雄二謎はもつともだ。そもそも僕たちである必要なんて言うのはどこにもない

もつと賢いAクラスの人たちに応援を頼むべきだろう

下げた頭をあげて学園長は再び説明へと戻る

「あんたたちは、あたしの薬に対して何らかの耐性があるみたいだからね。」

だからアンタたちには召喚獣がみえなかったんだろうとあたしは思っている

そのアンタたちなら眠りについたついた後にいる場所でも記憶が消えないだろう

そうなれば・・・」

「ここで聞いたことをすべて覚えているというわけだ。なるほどな」

「わかってもらえて何よりさね」

えつちよつと待って僕何にも理解できてないんだけど・・・

「まったく明久はどうしようも無いバカだな。」

バカとは、失礼なっ！

「いいか俺たちもこれからみんなと同じように眠るんだ

そして、眠っている中ではみんなが同じ夢を・・・つまりこの文月学園の試験召喚システムのある

夢をみる。その原因がこのどうしようもない研究者の薬だ。

しかし、俺たちにはその薬に対してなんらかの耐性がついている

つまり、向こうに行く際に記憶が消えないかもしれない、だとしたらその眠りの世界からの

脱出方法もわかるからZクラスをたおして無事に生徒たちを目覚めさせてくれるっていうことだ」

「おおなるほどなあわかりやすい説明やったわ。坂本君おおきに」

「お前もわかってなかったのか・・・」

今まで黙っていた渚さんもようやく張りつめた空気の中から解放さ

れたように

話に入ってきた。去年を見ている限りじゃそこまでバカじゃなかったと思うけど

その渚さんでもわからないのか、僕にわかるはずないよね

あんな難しい説明されてわかるの何て雄二くらいのもんだ

「それから、これをアンタたちに渡しておくよ。使えるかどうかはわからないけどね」

そういつて、腕輪のようなものを二つ僕と雄二に差し出す学園長

「それは、白銀の腕輪と黒金の腕輪っていうんだけどね

召喚者が付けるものなんだよきつとあんなたちの役に立つものだと思うよ

使えればの話だがね。内容は使ってみてのお楽しみさねそれじゃ武運を祈っているよ」

そういつと学園長は重い尻を持ち上げてクラスを出て行ってしまった

「それじゃ、俺たちも今日は家に帰るか・・・どうせ眠るのも俺たちが一番最後になりそうだしな」

そういつて雄二も立ち上がる

会議を終えて家に帰る途中僕は自分の思っていた疑問のことを思い出した

ああ、そういえば

「雄二ってなんではじめFクラスにいたの」

「あゝそついやそうだったな。あれは俺のミスだ。振り分け試験の時全部の答案に名前を書かないで

提出しちまったからどうせFクラスだろうと思って封筒の中身を見ていなかったんだ」

「それからさゝ」

「なんだ、まだあるのか」

「うん、雄二昔僕が召喚獣見えるかって聞いたとき見えるって答えたでしょ

あれって嘘だったの」

確かあの時確かに雄二はお前にもみえてるだろうと言っていたし

試^{サモン}獣召喚といったあとに笑みを浮かべるほどだったし見えてたはずだ。

「あゝ、あんときは見えていたぞハッキリと」

「じゃあなんでZクラスに」

「それがな、二か月くらい前から突然召喚獣のことが見えなくなっちまってな」

あゝそういうことだったのか。つまり雄二はだんだんと耐性がついていったってわけだ

僕はなぜだか初めからついていたみたいけど・・・

そうしているうちに分かれ道に来てしまった。

僕は右、雄二は左側だということここで別れる

「じゃあな明久、明日には落ちてろよ」

「そういう雄二こそ」

あつ、そういえば湊君たちと話そうと思っていたのに話せなかったな

また明日、声掛けよ

そうして、次の日。声をかける間も無く、雄二の言うとおり僕は落ちてしまった

—————会議終了後学園長室—————

「ずいぶんと面倒なことをするんだな」

「ほほう、何かいいたげだね」

「別になにも」

「ふん、いけ好かないガキだね。なんだいこんなところまで来て」

「別に・・・ただどういう意図があつてあんなことをしたのかが知りたくてな」

「どういう意味だい、ああ、Zクラスのことがい」

「とぼけなくていい」

「全てお見通しつてわけかい、まったくつくづくいけ好かないガキだね」

「まあ穴だらけのシステムだからな。錯覚だけじゃ無理が生じる

召喚獣のクラス間戦争の集中する二年だけを眠らして目覚めた時には賢くなっているというわけか・・・考えたもんだな」

「あれだけのことで、そこまで読まれるとは思わなかったよ」

「そりやどうも。でZクラスに集まったやつらは召喚獣についてのイメージがないから

あえて、事件を起こさせたように見せかけてイメージをつかませるというより、あのプラズマディスプレイに思いつきりのつてたしな。

あの赤いものが俺たちの召喚獣イメージ画像だったんだろう」

「それで、そこまで知ってアンタはどうするんだい？」

「俺の座右の銘はいつまでも傍観者。これもいつものようにみているだけさ」

「そうかい・・・そいつは何よりだ。」

「では、失礼する」

ガチャ

「あいつは確か、湊とかいうやつだったかね。何も起こさなければいいんだけどね・・・」

眠りと学園長の目的（後書き）

ようやく、原作のような話に入れそうです

また、まだまだ募集は続いておりますのでよろしく願います

また、話の内容に不備や意見などもございましたら

是非お寄せください

よろしく願います

僕とゲームと振り分け試験（前書き）

ようやく、堅苦しい自分で無駄だと思いつつ作ってみた設定から解放され、楽しいコメディー系が書けそうでしたまらなくテンションが上がってます

イヤッホーイここから見てくださいっても結構ですよ
特に無駄な設定だったので・・・orz

僕とゲームと振り分け試験

僕が目覚めた時、日にちは去年の三学期最終日の振り分け試験当日まで戻されていた。

つまり、僕も学園長の言う謎の怪人X（学園長に脅迫状を送りつけてきた奴）のゲームに招待されたわけだ。

とりあえず、この振り分け試験でAクラス入りしないと話にならない相手は、国の最高レベルの同年代たち。この学校で最高クラスにでもないかと勝てるわけがない

ってやば、そろそろ時間だ。朝食を食べてから・・・

って家に材料が一つもない。なんで、眠っている世界でも僕は貧乏学生ということかよ、畜生

仕方ない、朝食は抜きで行くしかない。なぐに現実世界でも同じようなものだったんだ

「僕には、砂糖と水さえあれば問題ないっ！」

よし、文月学園に行こう

「おお、明久。やっぱりお前もいたのか」

そう言つてこちらに近づいてくるのは、僕と同じでZクラスのことを聞かされている

僕の悪友の雄二だ。身長は180センチくらいで野性的な目をした、かつて神童と呼ばれていた男だ。

悪知恵だけなら、こいつ右に出るものはいない。

「あの事、覚えているか」

かがんで、僕に耳打ちをしってくる雄二

「あの事ってZクラスの事？」

「そうだ、覚えているならいい。」

「朝からあついなあ、お二人さん」

そう言つて声をかけてきたのは、またあの事実を知る一人の春風渚さん

背中まである長い黒髪とその関西弁が特徴的な女の子だ

「やめてくれ気持ち悪い。だれがこんなやつ」

「近寄つてきたのは雄二の方じゃないか」

「なんだ、やろつていうのか」

「あゝやつてやろつじゃないか」

「道のと真ん中でよくやるね君たちは」

そう言われてとっさに声の主の方を見ると、こいつもまた事実を知る一人の

花咲 湊君。その行動原理はすべて謎。すかした声と憎らしいほどのルックス。

女子からの告白が絶えずそのすべてを振っているとかいう何とも憎らしい・・・

「明久、黙って俺にナイフ向けるのやめてくれない？、軽く銃刀法違反だから」

「そういえば、あのZクラスのグループメンバー全員そろっているやん」

そういえばそうだった。何の因果かここに来て初めてであった人物というのはすべてZクラスの

グループメンバーだった。

「ちょうどいい、全員そろったところで一つ確認しておきたいことがある

お前たちの現実で受けた時の振り分け試験の結果だ。」

「なんでそんなこと聞くの？」

「俺たちはZクラスを倒さないとその世界から出られないんだぞ。

だとしたら、俺たちはできるだけ同じクラスにいた方が・・・」

「皆に伝えてしまえばいいんとちゃうん、そしたらみんなでZクラスを叩けば済む話やん」

「・・・・・・（汗）」

こいつ、そのことに気付いていなかったのか。

ふん、所詮雄二もただの人。かつては神童なんて言われていたけど過去の遺物だ。十で神童十五で才児二十過ぎればただの人ってね

「まあ一応言っとくわあたしはAクラスやったで」

「俺も」

二人とも賢いんだな。てつきり渚さんはもう少し低いもんだと思っただけだ

人は見た目としゃべり方で判断しちゃいけないね

「そうか、教えてくれてありがとう。感謝する」

かるく頭を下げる雄二。

「それにしても、よくできているな。眠っているとは思えない。そうだここはひとつフンっ！」

「ゴフっ！って痛いじゃないか。何するんだ雄二」

なんで、急に殴ってくるんだ。ついにイカれてしまったか。

ならば友として、ここは奴を助けるために・・・

「いたいのかゝりやますます眠っていることになんかきづかないな」

「どういうこと？」

「普通、眠っている夢の中っていうのは痛覚なんてもの存在しないから」

苦しいといった精神的なものはあっても物理的な痛みってもんはねーんだよ

だけど俺がさっき殴ったときお前は痛みを示した。つまりここは現実と対して変わらないってことさ」

なるほど、つまりここは夢の世界であろうとも現実となんら変わりのない場所なのか

なんか、事実を知っているだけになんぎだなあゝむしろ知らなかった方が楽しかったんじゃない・・・

「じゃあさっきのお返し、ドリヤッ」

「グフウ、テンメーなにしゃがる」

「さっきの理論が正しかったのか、僕も雄二で試しておいじろと思つて。いきなりだったから痛く感じなくても

痛いつてさけんじゃったかもしれないからね」

「ふざけるなっ」

「ふざけているのはどっちだっていうのさ」

「いい加減にしろ、貴様ら」

このドスのきいた声はまさか・・・

そう思い声の主の方を見ると立っていたのは筋骨隆々のこつこつい体格を

した男だった

「「げっ鉄人」」

「鉄人じゃない、西村先生だとなんだ言えはわかるんだ。

振り分け試験前だというのに余裕だな、吉井に坂本、さつさと教室に行つて勉強しろっ」

僕と雄二は、鉄人の制裁を入れられたあと、教室へと向かった

ちなみに、その時湊君と渚さんはすでにその場にはおらず教室に向かつていた

1年Dクラスという札の前で立ち止まり、僕は深呼吸をする。

「なに深呼吸なんてしているんだ、明久」

「だって、去年の皆に合うのって僕からすれば春休みぶりなんだよ」
みんな、どんなんだっ たっ け緊張するな」

「バカなことしてないで入るぞ」

中に入ると昔の懐かしい面々がそろっていた。その中には湊君や渚さんも入っている

「遅いですよ、吉井君に坂本君」

「「スイマセン」」

謝った後僕たちは席について、テストが来るのを待つ。

「では、全員そろいましたね。テストを配布します」

皆に配布したのをみて、「それでは、始めてください」と試験監督の先生が言う

問題を見てみると、現実で受けたテストとまったく同じものだった

これならAクラス入りも夢じゃないかも・・・

そうして、振り分け試験が終わった

僕とゲームと振り分け試験（後書き）

さて、そろそろ夏休みの終わりが近づいていますね

どうでしょうか、今回の話でようやくコメディーを少し
いれられたかなと言った気がします

面白くないならごめんなさいこれが私の精いっぱいです

それと、私のことを真面目な人としていただいている皆さま
それは大きな誤解です

なんで、こんなことを言うのかと言いますと

この前、親にこの作品を見せた時に、書く内容が全体的に堅っ苦しい
真面目な人間みたいやなと言われてしまいました

私はそんな真面目な人間じゃないですよ

むしろ不良です。字だけで人を判断するのはやめといたほうがいい
ですよ。また、まだまだ募集は続いておりますので

気軽にコメントしてくださいね。コメが来るたびに飛び跳ねるような作
者ですので、よろしく願います

では、また次回

僕は結局Fクラス（前書き）

テンションあがっている間に話をガンガン更新いたしますぜ
やっそここの辺の普通の話まで持ってこれて

書きやすいつたらないですね

なんか、皆普通にオリジナルキャラクターを転入生とかで
入れてるから、なんか変えたいな〜と思って作った設定だったのに
意外と重くなったりして・・・

これは本来のバカテストじゃないと憤慨されたかた
スイマセン。これからは普通にやりますんでっ！（キリッ）

僕は結局Fクラス

この文月学園に入って実質三度目の春が訪れた。

「まずいつ、また遅刻する」

まさか、同じことがこっちでも起こるなんて夢にも思わなかった

「こっちでもカレンダーが去年のものだったなんて・・・」

ええーい、文句を言っても仕方が無い

栄養源である砂糖と、水を体に吸引して、僕は家を出る。

「遅刻だ、吉井」

これって何かのデジャブ？

前にもこんなことがあったような、だとすると今回の声の主もやっぱり・・・

そう不安を抱えながら声の方に振り返ると、筋骨隆々のスポーツマン然の男が

予想通り立っていた

「おはようございます。今日も素晴らしい肌の黒さですね」

「お前は、遅刻への謝罪よりも俺の肌が黒い方が重要だというのか」

「そつちでしたか……」

「まったく、お前というやつはいくら罰を与えても懲りないやつだな」

ため息交じりにそうつぶやかれると何だか僕が遅刻の常習犯のように聞こえる

「先生、僕遅刻はあまりしてないですよ」

鉄人は、去年の僕たちのクラス担任だ。遅刻をしてないことは知っているはずなんだけど

「遅刻は、な ほら受け取れ」

そう言つて鉄人は僕に一つの封筒を渡す。その封筒の宛名の欄には吉井明久様と書かれてあった

「あ、どーもです」

軽く会釈しながら封筒を受け取る

その内容は、この前受けた文月学園の振り分け試験の結果通知だ。

現実にいる世界では、ここでZクラスって書かれていたんだけど

今回はそうはならないはず。

前に受けたテストと同じような感じがしたから「実際、鉛筆を転がして答えたので問題自体をあまり覚えていない」

一度解答をもらったテストだ。今回はAクラスも夢じゃないと思えるような出来だった

「吉井、今だから言うがな」

封筒が妙に強くテープ付されていてうまくはがれないな

「俺は去年一年間お前を見てきて、こいつはバカなんじゃないかと疑問を抱いていた」

どっかできたセリフだな。これもデジャブか？

いやいや、これも現実世界で鉄人に言われた言葉だ。

あんときの鉄人は妙に優しくなったからな。今回もAクラス判定をもらっている僕を見て

きつと俺の勘違いだったすまない。なんて言葉をかけてくるのか
もしれない

「振り分け試験の結果を見て、俺の疑問は晴れた」

さてちょうど封筒も開いたことだし、Aクラスという結果を拝ま
していただくとしましょうか

吉井明久

Fクラス

「お前は、正真正銘のバカだ！」

BAKATEST

次の四字熟語の読みを答えなさい

森羅万象

Fクラス花咲 ミナト 湊の解答
しんらばんしょう

先生のコメント
どうして、あなたほどの生徒がFクラスにいるのでしょうか
問題なく正解です

Fクラス吉井 明久の解答
もりらまんぞう

先生の解答
これこそがFクラス生徒の解答です

Fクラス坂本雄二の解答
この世に存在する全てのもの

先生の解答
問題を読んでください

「やっぱり何度見てもすごい教室だなあ」

一度現実世界では見たものの、やはり呆氣をとられてしまう

通常の五倍はあるだろう広い教室。

僕は、ここに行くはずだったのになあ

もう教室を回る必要もないので僕はFクラスへと急ぐ

僕は2・Fクラスの教室の前で立っていた

いきなり初日から遅れたりなんかして、印象を悪くされないだろうか

悪い奴らはいないだろうか。

これからZクラスを打倒しようクラスの仲間不安を感じずにはいられない

「まあ、考えすぎか」

遅刻程度で深く考えすぎだったかな

そうだよ、相手はクラスの皆、仲間なんだ。何も心配する必要なんかないよね

むしろみんなが僕のことを気遣ってくれたりして（実際はただの寝坊だけど）

よし、信じよう。これから共に過ごす仲間たちを

意を決して僕は、できるだけ愛嬌たつぷりで言い放った

「すいません、ちょっと遅れちゃいました」

「早く座れ、このうじ虫野郎」

台無しだ

僕をうじ虫呼ばわりした教師がどんな奴なのかその教壇に立っている男の顔を見てみると

「あれ、雄二。なんでこんなところにいるんだよ」

Fクラスなんかにはいるはずがないであろう僕の悪友坂本雄二の姿であつた

決して教師なんかではない

「教師が、腹壊したとかでトイレに行っているらしいから俺が教壇に立ってみた」

「そうじゃなくて、なんでFクラスなんかにいるのかって言ってる

んだよ」

あまり大きな声では言えないのでここからは小声で話す

「だって、問題は前の時受けた振り分け試験と全く同じだったですよ」

「うん、そうだったか？ そんなのは知らん。俺は実力主義者だからな」

あきれた。こいつがここまでバカだったなんて思わなかった

まあ僕もここにいる以上人のことは言えないんだろうけど

「あゝ君たち。そこをどいてもらってもいいかね」

不意に、老人ぼけた声が後ろから聞こえた。

声の主の方を見てみると、寝癖のついた髪によれよれのスーツを着たいかにもオジサン風体の人が立っていた

着ている服が学生服じゃないし10代にもみえないから多分この人がこのクラスの担任なんだろう

お気の毒に・・・

「席についてもらえますか、ホームルームHRを始めますので」

「はい、わかりました」

「うーっす」

そういつて僕と雄二その他立っていた生徒たちはそこら辺の席へ？」
につく

「それでは、私がこのクラス担任の福原 慎です。よろしく願います」

そう言つて、黒板の方に向いたがすぐにこちらの方に立ち直つた

多分チヨークがなかつたんだろう。

「それでは、設備の確認をします。ちゃぶ台と座布団が各自に行きわたっていますか

なにか、不備があれば申し出てください」

40人近くが所狭しと座っているこの教室には机や椅子と言つたものは無い

あるのは、座布団とちゃぶ台だけだった

『先生、俺の座布団綿がほとんど入ってないんですけど』

「我慢してください」

『先生、窓が割れていて隙間風が寒いんですけど』

「わかりました、ビニール袋とセロハンテープを用意しますのであとで直してください」

『先生、俺のちゃぶ台の足折れたんですけど』

「木工用ボンドが支給されていますので、あとで自分で直してください」

これは、想像以上にひどい。辺りを見回してみると教室の隅では蜘蛛の巣が形成され

畳の地面には、カビが生えているといった具合だった

「必要なものがあれば、極力自分の力で調達するようにしてください、それでは

これから自己紹介をしてもらおうかと思います。それでは廊下側からお願いします」

そう言われて畳から立ち上がり自分の名前を告げる

「ワシは、木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

ん？誰かと思えば秀吉じゃないか。あの独特な話かたと

ぱつと見はどこをどう見ても女子にしか見えないルックス

じっくり見ても間違ってしまいそうだ

うん、あれは去年同じクラスだった木下秀吉だね

「一年間よろしく頼むぞい」

そう言つて軽やかに微笑む秀吉

可愛いなあゝ

「……土屋康太」

秀吉を愛でている間に次の生徒が自己紹介を始めていた

どれどれ、つてこれはまた知り合いだ

相変わらず口数のすくない男だ。

小柄な体に引き締まつた体。運動神経のいいみただけど

なんで、あんなにおとなしいのかな？ やっぱり目立つとやりにくい
のかなイロイロと

それにしても、学力が低くなると女子は少ないんだろうか？

見渡す限りむさい男ばかりだ

「―海外育ちの帰国子女です。趣味は」

おっともう次の自己紹介が始まっているのか

「吉井明久を殴ることです」

だれだっピンポイントかつ危険な趣味の持ち主は

「はろはろーうちもFクラスよ。よろしくねよ・し・い」

これもまた知り合い、去年途中から転校してきた僕の天敵である島田美波さんだ

すらつとした長い脚と釣り目で攻撃的な目がちやむポイントのFクラス唯一の女子だ

類は友を呼ぶということなんだろうか、この人と同じクラスになるなんて・・・

それからしばらく名前だけを言うといった作業が進行してまたもや知り合いにであった

「どうも、花咲 湊です。座右の銘はいつまでも傍観者です。一年間よろしく願います」

そういつて、いつものように華麗な笑顔でシメル湊君。なんかあの笑顔見ると嫉妬しちゃうんだよね

あとで、殺そう。それはこのクラス全体が思っていることだったように感じられたんだけど、まあいいやそれより

まさか、湊君までFクラスだったなんて、でも彼は確か現実で受けたテストではAクラスだったって言ってたよね

なんで、Fクラスなんかにいるんだろう

そうして次は僕の出番だ

ここは、フレンジーに行こう。

「吉井明久です。気軽にダーリンって読んでくださいね」

『『『『ダアア〜〜リイ〜〜ン』』』』

ふ、不愉快だ。

「失礼、忘れてください。とにかくよろしく願いします」

そうして、僕の自己紹介も終わり残すところは雄二だけとなった

「坂本君は、確かFクラスの代表でしたよね。前に来て自己紹介をしてはどうですか？」

そう言われると、雄二は畳から立ち上がり前の教壇に立つ

「俺が、このFクラス代表の坂本だ。代表とでも坂本とでも好きなように呼んでくれ」

代表と言ってもFクラスの代表だ。頭が悪い奴らの中で少し頭が良かったってだけの話だ

他から見ればどんぐりの背比べと言ったところだろう

「さて、皆に一つ聞きたい」

ゆっくりとみんなに目を向ける雄二

間の取り方がうまいせいか皆が雄二の方に注目する

古く汚れたちゃぶ台

薄汚れた座布団

カビ臭い教室

皆が、雄二の言う所々に目を向けていく

「Aクラスはノートパソコン支給の個人用エアコン、リクライニングシートまであるみたいだが」

そこでふっと一息いれてこう告げる

「不満は無いか」

『おおありじゃ~~~~~』

「だろう、おれだってこの状態は代表として問題意識している」

『そうだ、そうだ』

『そもそもAクラスもFクラスも学費は同じだろうクラスの設備に差がありすぎる』

『いくら学費が安いからってこれはあんまりだ』

せきを切ったように不満を上げ始めるみんな

「みんなの意見はもつともだ」

級友たちの意見に満足したのか自信にあふれた不敵な笑みを浮かべて

「これは代表としての提案なんだが」

野性味満点の八重歯をみせ

「FクラスはAクラスに試召戦争を仕掛けようと思う」

これが、Zクラス打倒の作戦の始まりだった

僕は結局Fクラス（後書き）

今回はずいぶんと原作にそったような気がします

次回以降はオリキャラの関係と姫路がFクラスでない関係で話の内容をかえられるかとおもいます

まだまだ、Zクラスメンバーの募集を行っていますので気軽にコメントしてくださいね

よろしくおねがいしますOTL（土下座）
というわけでまた次回

僕と疑問と宣戦布告（前書き）

お久しぶりとなりました

学校が始まってしばらく更新できなかったのですが
どうにか時間ができたので更新に嗅ぎ付けたって感じでは
しばし長い文章になりますがお読みください

僕と疑問と宣戦布告

そう言つて雄二は自信満々にAクラスへの宣戦布告宣言をして、自分の席に戻つてしまった

それにしてもなんで雄二はZクラスへの宣戦布告宣言ではなく、Aクラスにしたんだろう。

普通、Zクラスを倒せばこの世界から出られます、なんて言われたら目指すのはZクラスのはずなのに・・・

「えーそれではこれでHRを終わりたいと思います。今日はこれで授業は終わりですが
明日からは本格的に授業が始まるのでしっかり準備をしておくように」

よれよれの声で皆にそう伝えると、福原先生は逃げるようにこの教室を去つてしまった

そんなにいやなのかな

「おーい明久、少し用があるからこっちにこい」

先ほど自信満々にAクラスに宣戦布告宣言をした雄二が僕のことを呼んでいた。

僕は呼ばれるままに雄二のもとに行くとそこには、雄二、秀吉、島田さん、湊君、土屋康太^{ムッリーニ}

と、僕の知っているメンツがそろっていた

「よし、全員そろったな」

そう言つて雄二は、そこにいるメンバーを見回しそれから対Aクラスについての話を話始めた

「朝言つたAクラスへの試召戦争で、手始めに俺たちはEクラスに宣戦布告はしに行こうと思つている」

僕は雄二にどうしてZクラスのことをみんなに話さないのか聞こうと思つたが、雄二がなぜかそれ隠すよう

僕に、眼で伝えてきたので僕は少し黙つておくことにした

「でもどうしてEクラスなの？直接Aクラスをたたきに行けばいいじゃない」

島田さんは僕の言いたかつたことその2を代弁としていつてくれた
もしAクラスを倒すのならEクラスなんか倒す必要なんてないんだ。
直接たたきに行けばいいだけの話

でも雄二は、そんなことを聞かれるなんて思わなかつたとあきれた
ような顔をしていた

「いいか島田。俺たちはFクラスなんだぞ。Aクラスは学年トップ
が集まるクラスで

Fクラスは学年の底辺が集まるクラスだ。そんなところに直接挑んだところで勝ち目はないだろう」

「そ、それもそうね。でもそれを言うならEクラスにも勝てないんじゃない？」

「それは、作戦しだいだな。このクラスというより今集まっているこのメンバーは基本一教科の成績が群を抜いて良い奴らばかりだ。担当の教師の使い方によっては勝てないこともない。」

雄二はこういうことに関しては神童と呼ばれるのも納得のできるほど頭が冴えていた

しかし、勉強することに飽きてしまったらしく学力の方はFクラス並みなんだ。

まったく、僕と違って根はいいんだからしっかり勉強すればいいのに・・・

「で、その作戦のことなんだが・・・」

一通り雄二のいう作戦の説明が終わった

僕には何を言っているかさっぱりわからなかったけど、どうやらみんなは理解できたらしい

僕ってそんなにバカなのかな

「それで、明久。お前にはこれからEクラスにFクラス大使として
宣戦布告に行ってもらいたい」

「えゝ、でも下位戦力の使者って結構ひどい目に合ってるよね・・・
」

「大丈夫だ。あれは映画やドラマの中のはなしだろ。本当に大切な
使者にそんなことすると思うか」

さとするような口調で、まっすぐに僕を見つめる雄二。

「大丈夫だ、俺をしんじれ・・・信じろ」

こいつ噛みやがった。ってことは騙す気満々だったってことじゃな
いかっ！

もう信じられないね。あんなに真剣なまなざしでいうからうつかり
信用しかけてしまったよ

ふん、あまかったな雄二

「僕はいかないよ。どうせ映画通りってひどい扱いをつけるって
いうのが落ちなんですよ」

「はゝじゃあ仕方ないな。せっかく行ってくれたら今度おまえんち
に差し入れ持っていこうと思っていたのに」

ぐ・・・汚いマネをしてくれるじゃないか。事実を知っていても僕
は食事にも飢えている

正直こんな条件はめったにない。行くべきか、行かないべきか

「わかったよ、行ってくるよ」

やはり背に腹は代えられない。いくらひどい仕打ちを受けたところで差し入れが来るなら

それを取らないのはもったいない

「わかってもらえたようであれしいぞ明久。じゃあ明日の午後1時開戦ということよろしく頼む」

「想像以上だった」

これは前回の僕の考えを見直す必要があるかもしれない。食事、なにそれ生きてなきゃ食べられないよね

Eクラスの連中僕が入ってきた途端にいきなりはさみやら机の鉄の部分で折ったりして僕を襲いに来たよ

しかも、Eクラスは運動のために頭の悪いような連中ばかりだ。

だけど、僕も一年のころ鉄人に鍛えられたからね。どうにか全身骨折くらいで済んだ。

こんどから、食事なんていう誘惑に負けられないね

「俺にひざまづくのはいいが、しっかり宣戦布告はしてきたんだろ
うな」

誰が雄二なんかひざまづくものか！ただEクラスの連中にやられた背中と腕とひざと足と腕と指が

痛んで立ってないだけだ

「してきたよ」

「それじゃあ今日はこれで解散だ。健闘を祈る」

皆が帰った後、僕は雄二にさっきは眼で合図されて黙っていたZクラスについて聞いてみることにした

「ねえ雄二。なんでみんなにZクラスのことはなさなかったの？」

「よく考えてみる。いままでなかったクラスがあつたらこの学園のことだすぐに噂になるだろうが

そうなるはずが、だれもZクラス存在を知らない。この学園にZクラスなんてものが現時点では存在しないんだ」

「え？どういうこと。じゃあ僕たち出られないじゃん」

「その通りだ。だとすればそのZクラスが出てくるまでの間俺たち

がすることはこのFクラスの士気をあげて
勉強に力を入れさせて、来たるべき時まで力を蓄えることだ、な
に心配するな必ずあらわれるさ」

「でもじゃあどうしてAクラスなんて狙うの？」

「みんなの勉強のモチベーションアップの一過程でしかねーよ。お
前もみただろうあの設備」

あんな設備で勉強できるとなれば皆だって少しは今までよりやる気
をだすだろう。その上その設備が

Fクラスのものになったのだとしたら、俺たちを倒そうとするほか
のクラスも俺たちに試召戦争を仕掛けてくる
そうなれば、その設備を守るために嫌でも勉強するだろ」

まさか雄二がここまで考えているなんて思わなかった。始めにでた
あの設備って言葉の先は

「あの設備で楽しんでえ」なみたいなことだと思ってた

のんきそうな顔して案外そういうところはしっかりかんがえている
んだよね雄二は

でも、Aクラスに勝つことなんてできるのだろうか。

学年主席の霧島さんや次席の姫路さんなんかはAクラスの実力じゃ
ないといわれている

むしろZクラスに匹敵する実力の持ち主だろう。たしかにZクラス
はそんな生徒がごろごろ転がっていて

その人たちに勝とうって思っているけどいくら雄二が完ぺきな作戦を立てようが今の状態ではAクラスにも

到底勝てるとは思えない

「余計なことは考えるな。お前のバカな頭では考えるだけ時間の無駄だ。俺がしっかりと誘導してやるから」

そういうと雄二は「俺、眠いからもう帰るわ」と言っただけで帰ってしまった

しかし、改めてみても完璧にされた世界だと思う。人間の脳というのは人間がその能力の一部しか使えてないだけで

脳というのは実は完璧なんじゃないのかと思えるような現実の完全再現だった

Fクラスのボロさまでそのまま、先生の反応も大体合っている。後の問題は・・・

「召喚獣が見えるか、見えないか、でしょ」

誰かに僕の心を読まれてしまったようだ。僕ってそんなに顔とかに出るのかな

・・・って

「いったい誰？」

教室にいるのは僕一人だったはずなのに、いつの間にか誰かが僕の

正面に立っていた

「俺だよ、俺、俺」

「俺俺詐欺ってふるっ……って湊君か」

僕の前に立っていたのは、いつも謎だらけでそのうえ透かした声とすらった長い脚

美しい容貌。完璧なまでのイケメンの湊君だった。見ているだけで殺意が……

「その君ってつけるのやめてくれない。なんか堅っ苦しいじゃん」

そう湊君は言うけれど、なかなか呼び捨てにしづらい。なんでかはわかんないんだけど

敬えるというかなんというか。本人の希望なのでこんどからは呼び捨てにするよう心がけよう

「それで、湊はなんでこんなところにいるの？」

「Fクラスなんだしいてもおかしくないんじゃない」

「そういう意味じゃなくて、湊ってもととAクラスの人でしょ。なんでこっちの世界に来てFクラスなんかに来たのさ」

「いやゝなんかテストの内容全くおなじだったから目つぶっていったらFクラスになっちゃったんだよ」

なんてもつたいない。相変わらず何を考えて行動しているのかわからない人物だ

テストを、いくら問題が全くおんなじだったからって目をつぶって解くことないのに

「それで、初めて召喚獣を見れる感想は？今の心境はどうな感じですか」

「いやいや、そんなテレビポーターっぽくいわれても・・・そうだなあゝ正直まだ見られるとは思えない
だって僕ははじめっから見る事ができなかったんだよ。だからまったくといいほど想像できない」

「そつか。じゃあ俺たちも帰るとしよう。」

「うん、そうだね」

そうして、重量詰まった一日を終えた

学園長室

「学園長」

「なんだい、高橋先生」

「どうやら、2年生のほうで少しトラブルが起きたみたいです」

「なんだって、それはどういうものだい」

「なんでもZクラスが学園にないということになっているそうで」

「そんなわけないさね。しっかりZクラスというものを用意したはずさね」

「しかし、吉井明久の脳の電波を受信し解析して言葉化したものによるとZクラスは出現しておらず

この学園の最高は今のところAクラスだそうです」

「いったいどうしてそうなったんだろうね。いそいで調べてみるさね」

「よろしくお願いします」

僕と疑問と宣戦布告（後書き）

ここまで読んでいただいております

あと募集の方なのですがどうやらどのようなことを書いたらよいかというのがあやふやなようでしたので少しでも一応目安となるようなものだけ

書いておきますね

？名前

？得意科目

？大体の性格【例：暴力的、優しい】

？その他特別な口調などありましたらよろしく願いします
では、みなさんまた次回

僕と戦争と告白（前書き）

キャラクターの応募をしてくださった二人の方。ありがとうございます

またしばらくしたら出てきますのでそこまでしばしお待ちを話の方ですが、少し学校や勉強の方が忙しくなってきたのでもしかすると誤字や脱字が増えるかもしれませんその時は教えてくださるとうれしいです
それでは本編スタートです

僕と戦争と告白

今朝僕は珍しく早く目覚めてしまった

せつかくの睡眠が昨日のことで疎外されてしまった。

はじめのころは、眠っているなかで眠るって変だなって寝ることに違和感を感じていたんだけど

最近じゃ当然のように寝ている。いやゝ慣れっておそろしいものだね
二度寝する気もおこらないのでベットから体を起こしてリビングの方へと向かう

時計を見てみるとまだ朝の6時だった。

特に早く起きたからといってすることもないのでいつものように
歯を磨いたり、顔を洗った後で朝食である水と塩の食べて制服に着替えることにした

学校に行く支度を整え終えた時にはまだ朝の7時だったが、

家にいてもすることがないので学校にちよつと早めの登校をすることにした。

学校についたとき、庭の方には一人の男が庭の手入れをしていた。

「こんな朝早くに誰だろ？」

自分でも今日は早く登校しすぎだったかなと思っていたため学校に人がいることに驚いた

まあ自分が早くに登校しているんだからその人もそれなりの理由があつて登校したんだろう

そう納得したあとで僕は庭で手入れをしている人の方に向かった

よく見てみるとその人は生徒ではなく教師であつた。

それも、僕がよく知る人物。筋骨隆々のがっちりした体形で身長は180センチ強。

スーツの似合わないスポーツマン然の男。

鉄人だ・・・

鉄人だということを知り、「こんな朝早くによく来たな吉井、そうかそんなに俺の補習が受けたいのか」

などと言ってあの拷問のような補習を受けさせられたらかなわないので

逃げようとしたとき鉄人は運悪く僕の方に振りむいてしまった

「おはよう」

何ともさわやかな笑顔で僕に挨拶をしてきたのだ。

「おはようございます、鉄人先生」

僕があいさつを返したときにようやく挨拶をした相手が僕だと気づいたのか

さわやかな笑顔を取り消して、あきれたような顔をしていた。

「なんだ、吉井か。それと鉄人先生じゃない西村先生だ。俺の名前があたかも鉄人だというように言うのはやめろ」

「ゴフウ」

恒例と言わんばかりに僕の腹に一発お見舞いしてきやがった

いきなり生徒のことを殴るなんて、教師の風上にも置けないやつだ
僕が腹をさすりながら立ち上がると次はいぶかしんだようなめで僕を見ていた

「貴様ら、何かたくらんでいるんじゃないだろうな。」

どうしてかと聞くと、Fクラスの生徒が僕を含めもう3人も登校しているらしいのだ。

そう言った後、鉄人は「何をたくらんでいるかは知らんが、あまり迷惑をかけるな」

といって教師用校舎の方に向かって行ってしまった

僕も教室の方に向かおう。一体誰が来ているんだろう

気になるから僕のは次第に早くなってあつという間にFクラスに到着した

そして、Fクラスの教室の中からは世にも奇妙な言葉が聞こえてきた

「あなたのことが好きです。付き合ってください」

僕はとんでもないところに遭遇してしまったようだ。

Fクラスの中では告白が行われていた。Fクラスの女子は島田さん一人だけだ

相手は誰だろう。気になったけど邪魔をしたら悪いと思って教室を後にしようとしたとき

運悪く、教室から島田さんが出てきてしまった

今日は厄日なんだろうか、朝の睡眠時間は減らされるし、朝いきなり鉄人に出会っし

最後には告白している女子が目の前に現れるし。

ってそんな事考えてる場合じゃない言い訳を考えなければ

「吉井、なんでこんな朝早くにいるのよ。もしかしてさっきのきいた？」

ビクッ

「ごめんなさい、つい・・・」

「そうじゃなくて、あれは違うのよ。詳しくは言えないけど・・・」

そう言っただけで顔を真っ赤にして俯く島田さん。こうしてみると何だか普通の女の子みたいだ

いや、実際に女の子なんだけどね・・・

「とにかく、さっきのことは忘れなさい。いいわね」

そう言っただけの方へと走って行ってしまった

それじゃ、島田さんもいなくなっただけ、

『『告白されたものの処刑を開始する』』』

うわっ誰？そう思って後ろにふりかえると、

黒マントを着た男たちが20数名そこにはいた。

「我らは異端審問会。この度は協力感謝する吉井」

そう言って顔のかぶりものをとったのは僕と同じFクラスの確か名前は・・・須川君だったかな

それにしても、いつの間にこんな集団ができていたんだろう。そんな謎を浮かべていると

須川君は「吉井も我ら異端審問会に入らないか」と僕のことを勧誘してきた

すごく不気味な集団だから正直遠慮したいところだったんだけど、内容を聞いてみると

僕とばつちり意見が合うようなので入ることにした

「それではこれより島田美波に告白されたものの処刑を開始する。皆武器はもったか」

みんなは、鎌や斧、鉄球など個性あるさまざまな武器を振りかざして「お〜〜」と叫んでいた

「それでは、いくぞ〜〜〜」

そう言っで一斉に教室に入ったとき皆の目には一人の男の姿が目に入った

花咲湊だ。彼がどうやら島田さんの告白相手だったらしい

確かに、スタイル抜群で学力においても問題ない実力。少し謎な部分は多いけど

好きになるには十分すぎる素材がそろっている

「ねえ君たち、何の用」

透かした声で僕たちの方に問いかけてくる。

『やっちまえ〜』

皆がすごい勢いで湊の方へ向かって個性あふれる武器を手に襲っている

しかし、その武器は一度として彼の体には当たらない

『なんで当たらないんだ』

『化けもんだ』

あまりの圧倒的な強さに、皆が口ぐちに弱音を吐きだした

そりゃそうだ、一発も当たらないんじゃさすがにきつい

「大丈夫だ、振り回していれば必ず当たる」

須川君も必死にみんなのモチベーションを上げようとするが、力の差がありすぎるせい

誰も、彼の言葉に耳を貸さない

そして、湊から戦いに終わりを告げる一言が発せられた

「そろそろ、終わりにしとかないとこっちからも仕掛けるよ」

目がマジだ。もうそろそろよけるのにも飽きてきたのだろうか皆を片づける気満々だ

皆もその眼を見た途端追い出されるかのように教室から出て行ってしまった

そして、教室には僕一人が残される羽目となった

「そこでボケーっとしてるのはだれかな」

あ、そういえば僕もマスクしてるんだった

マスクを脱ごうとしたところで僕はその手をとめる。ここではしゃまっては

島田さんのことで多分僕はタブーのことを質問してしまうだろう

そうなると正体がばれていないというのはラッキーなのかもしれない

よしっ！そうと決まれば・・・

「ダッシュ」

「なんだ、明久か」

な、なんではれたんだ。それに足早すぎ。もう僕の前に立っている

僕が教室から出ることもできないなんて、さてはこいつ最初から分かっていたな。だから僕が逃げることも考えて・・

なんで誰、なんて質問をしたのかはわからないけど初めから知ってたような顔をしている

僕が必死に考えること楽しんでいるみたいだ。

そして最後に僕の結果が踏みつぶされる。そう考えるとこいつって実はDSなのかも

「で、明久もあの連中の仲間なの」

「うゝん多分そうだと思う」

まあ、半ば適当な気持ちとは言え勧誘を受けてそれに応じたんだ

入っていると言えるだろう

「あの連中、去年から俺のことしよっちゅう狙ってきてたから慣れてるんだけど

学習しない連中だな」
「と思ってたら全員Fクラスだっていうから参っちゃったよ」

へえゝもともとあのチームはあったのか。通りで結束力も強いわけだ。

確かに湊は異端審問会の天敵ともいえる存在だろうね

女の子にも持てるし、今日だって島田さんに・・・告白されてたし

いやいや、この話題だけはだめだ。他の話題を探そう。・・・そう
だっ！

「ねえ、今日湊はなんでこんな早くに学校に来たの？」

「いや、島田に朝7時に学校に来てって言われたから来たただけ
ど」

OH NO、この話題には触れまいと思ったのにどうしてこうも嫌
な方向に話が進むんだ

島田さんのさっきの反応といいこれは間違いない相手は湊だ

「で、どう答えたの」

「いや、話が飛びすぎてわからないんだけど」

「あ、ごめん僕さっき島田さんが君に告白するところを聞いちゃっ
たんだ。それでどう答えたのかわかって思っ

「いや、何とも答えてないけど」

何も答えてない・・・ってことは湊は島田さんの答えに対して返事
をしなかったってことなんだろうか？

「じゃあどう答えるつもりなの？」

「いや、別に何とも答える気はないけど・・・」

何とも答える気がない、って

「湊、それはひどいよ。せっかく島田さんは自分の気持ちをぶつけたっていうのに
いくら興味がなくなっただからってあんまりだよ」

その平然としている面がむかつて殴ってやろうと腕を前に出した
があっさりとかわされてしまった

その後もずっと湊を殴ろうとなんどもこぶしを握ったがけつきよく
全てかわされてしまった

「もういいだろ」

そう言い残して彼は教室を去ってしまった。

確かにその賢さや身体能力の良さ、ルックスは認める。だけどそんなのはあんまりだ

島田さん、今頃泣いているんじゃないだろうか？

「チーッスって明久か、今日はずいぶんとはえーじゃねーか」

雄二がそういつて入ってきたのをみて、僕は時計をみた

すると時計の針はすでに8時前をさしていた

しばらくすると、さっきに異端審問会の連中や、ほかの人も集まってきたけど

そこに、湊と島田さんの姿はなかった

昼休みが終わり、僕たちFクラスは全員Eクラス戦に燃えていた

なんでも、雄二がかつて神童と言われていたことは誰かが知っていたらしく

それで、こいつがいれば、みたいな雰囲気になっているのだ。

しかし、僕だけは今の時間になっても戻ってこない島田さんのことが心配で試召戦争どころではなかった

多分そうとうなショックだったんだろうな

僕にも、忘れろっていうくらいだもんね

そんな事お構いなしに雄二はクラスの皆を盛り上げているし皆もそれに乗っている

「俺たちに必要なのは」

『Aクラスのシステムディスクだっ！』

「これから戦うEクラスは」

『我らの敵に非ず』

相変わらず、雄二はすごかった。たった一日でこのクラスをまとめ上げたのだ

もとからリーダー気質なのかもしれない

「ふう、ただいま」

「お、島田か、ずいぶんと手こずったみたいだな」

「いや、そういうわけじゃないんだけど・・・」

島田さんは僕の方をちらつと見て雄二の方に再び視線を戻す

つらかったんだろうね、だから雄二に言われたことに手が付けられなくて

「まあいいさ。で確保はできたんだな」

「うん、湊がウチの代わりにマーキングしてくれてる」

湊？なんで島田さん湊なんかと一緒にいるんだ。あいつは島田さんの心を踏みにじった張本人だというのに

島田さんに悪いのでここで直接聞きはしないけど、あとであいつは絶対殴ってやる

「よし、開戦だ野郎ども攻め落とすぞ」

『『『お~~~~~』』』

「ムツツリーニ、敵の情報は何か分かったか？」

「・・・Fクラスをなめてかかってきているのか、代表自らが動いている」

「ほう、そりゃご苦労なこつたな、明久、湊を呼んできてくれ回復試験の準備だ」

「嫌だよ」

僕がどうしてあんな外道のことなんか迎えに行かなきゃならないんだ

「はあゝ、何があつた？」

「・・・」

「まあ言えない事情は誰にだってある。ムツツリーニ頼めるか」

「・・・了解」

「それじゃあ、明久。お前は先頭部隊の様子を見てきてくれ。もし分が悪ければ応戦してきてくれ」

「わかったよ」

FクラスとEクラスは教室がすぐ隣だったので、すぐに先頭部隊の様子が見えてきた

「おゝ明久か、ちょうど良いところに」

「どうしたの、秀吉」

「少し、点数を消耗してしまった。すまんがここを任せても良いかの」

秀吉の点数を見ていると全教科30点無いほどにまで消耗していた

「わかった、任せて」

「すまん」

「五十嵐先生Eクラス鈴木次郎、吉井明久に召喚を行います」

「承認します」

僕はその言葉を聞いて、少しの間呆気にとられてしまった。

教師が承認しますと言ったとたんに何かのフィールドがその教師から半径3メートルほどで構築されたのだ

そうして

「サモン試獣召喚」

これが、僕が一番驚いた光景だった。なんとそのフィールド内に鈴

木君をデフォルメしたような

召喚獣が現れたのだ。僕はあまりの嬉しさに胸の鼓動が早くなった
1年の試運転の時から一度として見ることでできなかった召喚獣が
いま僕の目の前にいるのだ

「吉井君、早くしなさい。でないと戦闘放棄とみなしますよ」

その言葉で、我に返ったが胸の鼓動はまだ早い

ついに僕の召喚獣を見ることができるようだ

「^{サモン}試獣召喚」

すると、僕の前にも僕の姿をデフォルメした召喚獣が現れてくれた。

改造学ランに木刀という不良まっしぐらの格好をした僕の召喚獣。

見ただけでいいと思いかけた時に向こうの方で

「戦死者は補習」という言葉が聞こえてきた。試験召喚システムの
一つである戦死した場合の待遇だ

もし召喚獣の点数が0になった場合、その場で鉄人によって連行さ
れ、鬼の補習を受けさせられるのだ

見られただけでいいと思っていた自分の考えを改め戦いに集中する

Eクラス

鈴木次郎

VS

吉井明久

これは、ひどい点数差だ。勝てる気がしない

何か方法はないかと探していたとき、ふと手に巻いてある腕輪が目
に留まった

そういえば、学園長が役に立つかもしれないと言ってたな。なに
なに起動ワードはスタート・アップ

なにこの恥ずかしい起動ワードは・・・でも鬼の補習はなんとして
も防ぎたいのでしかたなく

その恥ずかしい起動ワードを叫ぶことにした

「スタート・アップ」

EクラスどころかFクラスの連中にまでバカにされたけど、僕は耐
えた。

耐えたけど、何も起こらなかった。

・・・

あのクソババアめ。何が役に立つだ、何も起こらないじゃないか

そう怒っていると向こうの方にいた鈴木くんが僕の召喚獣に攻撃を
仕掛けてきた

召喚獣の操作は案外難しく僕は鈴木君の召喚獣に一撃くらった

「あゝ頭が割れるように痛い」

なんでだろう、僕にも痛みが返ってきた。すごい痛みだ。

皆、召喚獣が攻撃を食らうと自分も痛むんだろうかと周りを見てみたがそうではない様子

つまり、あのババアが作ったせいでこうなったんだ。役に立つどころか悪いことばかりだ

Eクラス	鈴木次郎	VS	吉井明久
化学	68点		11点

点数も減り、僕はもう負けることを覚悟したとき

「Fクラス花咲 湊、吉井明久に加勢します試験召喚^{サモン}」

隣に突然湊が現れた

湊の召喚獣は本人に似たかつこいい召喚獣でホストの着るスーツにバラと言った装備だった

「何しに来たんだよ」

「なにって回復試験が終わったから助けに来ただけ」

「僕は、君には助けてほしくなんかない、女の子の告白を踏みにじるような奴」

「はあ？何言ってるの。俺がそんな事するわけないじゃん」

「だって今朝島田さんに告白されたって」

その言葉でFクラスの大半の生徒がこちらの方を向いたが今は戦闘中なのですぐに戦闘の方に

意識を戻す。よかった戦争中で

「ああ、てことははじめから聞いてたわけじゃないんだ」

何かに納得したように首を上下に振る湊。なにを理解したんだろう

「あれは、俺への告白じゃないよ。」

そういうと彼の召喚獣の点数が表示される

Fクラス

花咲湊

化学

301点

Eクラスの連中がなんだよあの点数などと騒いでいたが僕の頭は別のことでいっぱいだった

どういうこと、告白の相手は湊じゃない。じゃあ僕が今まで湊にしてきた行為って・・・最悪だ

勝手に殴って勝手に起こって外道呼ばわりまでして僕は湊にどう謝ればいいんだろう

「ごめん、湊。僕勘違いしてたよ」

そういうと湊は優しい笑顔で僕のことを迎えてくれた

「しかたないな。」

その笑顔は今まで彼の見てきた笑顔の中でも飛び切り優しいもの
に思えた

僕は、その言葉に押されるように立ち上がった

「それじゃあ、ここから反撃と行きますか」

試召戦争は瞬く間に僕たちFクラスの勝利で幕を下ろした。敵が油
断していたというのもあったが

湊のかしこさが飛びぬけていた

わずか1時間にして必要な教科のテストを受けそのすべてが30
0点以上という驚異的な力

そして、雄二の作戦というのは、教師の確保のことで、どうにか持
ちこたえるための前線を僕と

秀吉、島田さんの順番で行い、その間にムッツリー二はできるだけ
多くの科目の教師を確保

あとは、湊がどこまで早くて高得点を出せるかが勝負だったらしいんだけど

湊君は、前線で僕たちが守る必要がないくらいに早くそして高得点を挙げてくれたのだ

「本当にごめん、湊」

「だからいいって言ったじゃん。誰にだって間違いはあるって」

彼のおおらかさには感服してしまう

僕だったら多分覚えている限り怒っているだろう

「それでさあ明久、明久は初めから聞いてたんじゃなくて途中の告白の部分だけ聞いてたんだよな」

「うん、そうだけ」

それにしても、今思い返すと島田さんはいったい誰に告白をしていたんだろうか

「だったらさあ、今日の放課後、学校の屋上に行ってくれないかな」

「いいけど、なんで？」

「それは、行っただけのお楽しみ」

そういつて結局はぐらかされまたどこかへ行ってしまった

花咲湊、奴はいったいどんな性格をしているんだろう、今回のこと
でますますつかめなくなった

でも、彼がとても優しい人物であることだけはわかった

戦争の後だったので、特にこれといった授業もなく放課後はやって
きた

僕は、湊の言った通り屋上に向かった。そこで待っていたのは思い
もよらぬ人物だった

「吉井……」

「どうして、島田さんがここに？」

「あのね、吉井聞いてほしいことがあるの」

すごく真剣な表情でこちらの顔をみる島田さん

「あのね……」

少し、顔が赤い。熱でもあるんじゃないだろうか。無理してまで伝
えたい事っていったいなんだろう

「あのね、ウチは」

ずいぶんと躊躇しているようだった。何か伝えにくいことなんだろうか

そう思って顔色を窺っていると、何かを決めたような顔つきになって僕にこう告げた

「あなたのことが好きです。付き合ってください」

僕と戦争と告白（後書き）

どうだったでしょうか、試召戦争と告白といろいろ入ったせいでカオスになってしまった感が満載なんですが・・・

まあ恋愛に関しては、経験のない人間が書いたものだから所詮この程度か、とも思ってたさればうれしいです

また感想などありましたら、よろしく願います

では、また次回

僕と悪魔とDクラス（前書き）

しばらくぶりとなりました

島田から明久への告白の結果は！？

一体どうなるのでしょうか

また至らない部分ばかりとなりそうですが
よろしく願います

僕と悪魔とDクラス

「あなたのことが好きです。付き合ってください」

どういうことなんだろうか。島田さんが僕に告白？

いやいや、よく考えてみる。

僕はいつも島田さんを怒らせてばかりだ。

今日僕は、湊に言われてここにやってきた。

そして、島田さんの告白……つまり

「何かの、ドッキリなのかな？」

「……バカっ！」

えっ！？？！どういうこと。ドッキリとかじゃないの？

屋上を走って出て行ったとき、島田さん多分泣いてた。泣いている演技とは考えにくいし……

もしかして、さっきの告白って本気の……

「待つて、島田さ」

「呼び止めて、どうするの？」

「湊君、どうしてここに」

僕の前には、また彼がいた。

湊がいるってことはやっぱりドッキリだったんじゃない

なら良かった。僕のしたことは男として最悪の行為となるところだった

「はあ、やっぱり明久には説明しといたほうが良かったな」

僕の安心した顔をみて湊の顔はさらに険しいものへと変わっていた

「明久、よく聞けよ。さっきの告白はまぎれもなく本気だ。」

その言葉を聞いた途端、僕の全身に刺激が走って動けなくなった

「うそ・・・でしょ」

だって湊が来たじゃん。ねえこれもドッキリなんですよ

ちよつと意地が悪すぎるよ。本気だと思わせてさらに陥れるなんて

「いや、嘘じゃない」

その言葉を聞いて僕はもう、なにを話していいのかわからなくなつた

僕のした最悪の行為、人の本気の告白をドッキリなどと言った

それこそ、試召戦争中に最悪だ、外道だと言っていた湊と僕は同じことをしてしまったんだ

「朝のこと、覚えているか？」

「朝のこと？」

僕の意識はほぼなくなる寸前まで来ていた。

頭に言葉が何も入ってこない。かろうじて相槌が打てる程度

「ああそうだ。島田が俺に告白をしたって思っていただろ」

ああ、そんなこともあったな

でも、もうそんなことどうでもいいや。

明日、どという顔して島田さんに会えばいいんだろう。そっちのことで頭がいっぱいだ

「あれは、お前へ告白するための予行練習として俺が呼び出されただけなんだ」

そういうと、湊は僕に朝の出来事を語りだした

――――AM 6:30――――

「悪いわね、湊。こんな朝早くに呼び出して」

「いや、構わないけど俺に何の用？」

「うちね、好きな人がいるの」

「うん」

「それでね、その人に告白する時どついう風に言ったらいいかわからなくて、

それで、湊だったらよく告白されているし教えてもらえるかなって思ってた」

「俺に告白する人に限らず、みんなそうだと思うんだけど自分の気持ちを素直に話すよ」

「素直に？」

「うん、例えばさ、島田はなんでそいつのことが好きなの」

「うーん、それを言うのは恥ずかしい」

「俺に言うのが恥ずかしいのに本人の前でそんなこと言えるの？」

別に俺はそんな事聞かなくてもいいけど、告白っていうのはその恥ずかしいことを勇氣を持って伝えることなんだ」

「あんた、やけに詳しいし・・・その、優しいわねハッキリいつてここまで真剣に教えてくれるとは思わなかった」

「俺だつて好きな人がいたんだよ。その時おんじょうなことでよく悩んだなつて思ったただだよ」

「へえ、あんたにも好きな人とかいたんだ。あんなにモテるのに」

「モテるとかは関係ないよ。で話が逸れたね、で俺に何がしてほしいんだっけ」

「ちょっとあんたに告白するから聞いててくれない」

「別にいいけど、なんで」

「別にいいでしょ！素直に伝えるって言っても変になったら嫌じゃない」

「それで、告白しているシーンを明久が聞いたわけ」

湊君が、真実をすべて教えてくれた。とてもリアルに再現してくれたおかげでよくわかった

つまり、朝、告白の予行練習までして僕に告白をしてきてくれたのだそれに対して、僕は・・・怒りで自分の頭が破裂しそうになる

「あとは、どうするかは明久次第だから」

彼が屋上から消えてから数十分が経過して、やっと僕の頭にようやく考える力が戻ってきた

僕も家に帰ろうとして、屋上の階段から降りようとするところには愛を捨て哀に生きるを信条っていつてたFFF団の倒れている姿があった

つまり、さっきの会話を聞いた誰かがFFF団に連絡そうして駆けてつけて多分僕を殺ろうとしたけど

湊が全員倒してしまったということか……

やっぱり優しいな、ほおけていると知っていて、怒っているならFFF団にでも任せれば僕のことなんて

いくらでも、殺れただろうに……

結局その日は、何も考えることができることができずに眠ってしまった……

僕は、またしても早起きをしてしまった

でも今日は昨日と違って動く気が全く起こらず、いつも通りの時間帯に登校することになった

教室の中に島田さんの姿もあつたので、教室に入ること躊躇したけど、もうすぐ授業も始まってしまつので

教室へと入っていった。

教室に入るとそこにはいつものメンバーがそろっていて、また固まって作戦を立てていた

すると、僕の姿に気付いたのかある一人の男が僕の方に向かってやってきた

「明久、次は何をやらかしたんだ？」

朝一番に何をやらかしたのかと聞いてくるこの男は坂本雄二。

昨日、やらかしたといえは確かにやらかしたんだけど、もう雄二の耳にも入っているなんて・・・

「うん、ちょっとね」

「おかげで、DクラスがFクラスに試召戦争を申し込んできた」

ん？どういうことだろう。確かに昨日僕は島田さんのこといろいろとやらかしたけど

別にDクラスに試召戦争を申し込まれるようなことは何もやってないと思うんだけど・・・

「Dクラスにいる清水が吉井明久（豚野郎）を殺します。とか言っ
て入ってきたがいないと言ったら

「試召戦争を申し込まれてな、今日の午後からだそうだ。」

僕と悪魔とDクラス（後書き）

さあ次からはDクラス戦です

本編を見ている方々は、まあこうなるだろうな

と始めの時点で予想されていたかもしれないが・・・

短く終わらせるはずだったんですが、なかなかうまくいきませんね
また、何か意見などありましたらよろしく願います

僕と恋愛と戦争はこれからだ（仮）（前書き）

今回は少し短めとなりますが、ご了承ください
では、話をお楽しみください

僕と恋愛と戦争はこれからだ（仮）

ん？でもまてよ、なんで清水さんが起こっていたのかは去年をみていたからよくわかるけど・・・

「ねえ雄二、なんで清水さんは僕たちに試召戦争をするなんて言い出したんだろう」

「さあ、俺にもそんな事はわからねえ。そっぴやお前、前の試召戦争の時なにか痛がってなかったか？」

そつだ、僕はあのくそババアに渡された腕輪のせいでひどい目にあったんだつた

なぜか、召喚獣が殴られると、僕にまで痛みが返ってくる

召喚獣は、点数が低かったとしても通常の人の数倍もの力をもっている

その痛みが僕にもくる・・・そうかつ！清水さんはこれを狙って・・・

くっとなかなかグロいことを考えるじゃないか、でもなんでそのことをしってたんだろう？

「それで明久。お前には今回の試召戦争に出ないでもらう」

「えっどうして？確かに僕の点数じゃ役に立たないだろうけどいいよりは・・・」

「そうじゃない、よく考えてみる。お前は今回清水の恨みをなんらかの形で買った。」

つまり、向こうの狙いは最初からお前なわけだ。つまりお前が出ないと知ったDクラス、おもに清水は

今回の試召戦争に意味がなくなり、すぐにも試召戦争を取り消すだろう」

「でも、Dクラスも倒す予定のクラスなんでしょ？ だったら今から倒したって・・・」

今回の雄二は、どこか消極的だ。普段の雄二だったら多分Dクラスごとき俺たちの敵ではない

なんて言ってそうなもんだけど・・・

そう思って雄二の顔を見てみると、なにやら深く考え込んでいる様子

その雄二を見ていると、こちらの視線に気が付いたのか

「確かにそうしたいのは山々なんだが、どういわけか今回は島田と湊が試召戦争から外れるんだ。」

そうなる、今のFクラスではさすがにDクラスにはかてねえ」

どうして、島田さんと湊は、今回の試召戦争に参加しないんだろう？

確かに昨日の一件はあったけど別に試召戦争に出られない、なんてものでもないだろう

特に湊なんて、なにもしてないんだし関係ないようなきもするんだ

けど

僕がふと目をやるとそこには島田さんの姿があり、目があったとたんに「フンッ」とそっぽを向かれてしまった

確かに、昨日したことは最悪だ。いまだにどう謝ったらいいのかすらわからない

「おまえ、島田となにかあったのか」

しまった、今のやり取りでどうやら雄二に勘付かれてしまったみたいだ

どう言い訳をしようか？なにかいい方法は・・・

「なんだ、その告白をイタズラと勘違いしてしまって今まさに言い訳をかんがえています的な顔は」

僕ってそんなに顔にでるんだろうか

まさか、そこまでピンポイントでわかられるとは思わなかった

「まさかつ！」

「そのまさかだよ、そんなに僕って顔に出るの？」

「いや、島田がもう行動に出るなんてな、意外だった。」

「驚くのそっち！。ってことは雄二島田さんが僕のこと・・・だつてこと知ってたの！？」

「ああ、とつくにな。それにしても残酷だな、明久。まさか真剣な告白をイタズラなんかと勘違いするなんて」

「僕だつてそう思っているよ」

「二人だけで話すとは水臭いのう」

そういつて不意に僕たちの後ろに現れたのは、このクラスではもう女子だと思われる男子の秀吉だ

ぼくでも、一目見ただけでは男だとは気付かないだろう

「すまん、ワシらにも聞こえてしもうた」

ついに秀吉たちにも気づかれてしまった。

ん？わしらつてことは・・・

「・・・聞かせてもらった」

この言葉数の少ない感じは寡黙なる性識者^{ハツリーニ}か、こいつにもきかれてしまったのか

つてことは実質このクラスの友人全員にこのことがばれてしまったわけだ

「もうここから隠し事は無しだ。なにがあつたんだ明久」

雄二をはじめとして皆が僕の方に詰め寄ってきたので、どうせばれ

てしまったのだから

仕方ないと思って、僕は昨日の出来事をみんなに話した

「そりゃ、ひどいな」

「島田がかわそうじゃな」

「・・・鬼畜」

あの、口ぐちに感想を言わないでもらえるかな。本人がそういうこと一番わかってるから・・・

そういうこと何度も言われると、僕もう心折れちゃうかも

（でも、まあそういうことならこの試召戦争を使ってどうにかすることも不可能じゃないかもしれないな・・・）

今さっき雄二がなにかぼそぼそつぶやいていたような

「え？なんていったの雄二」

「いや、何でもない、それより今回の試召戦争だが、少しルートを変更する」

皆をなめまわすように見る雄二。こういうところを見るとやっぱり雄二はリーダー気質なのかもしれない

みんなもすでに、雄二の空気に飲まれている

そう冷静に考えている僕もすでにその空気に飲まれつつある

そうして、ゆっくりと告げる

「Dクラスをつぶしに行く」

僕と恋愛と戦争はこれからだ（仮）（後書き）

今回はDクラスとの戦争の前の話です

Dクラス戦に行けるかなと思ったのですが

やはり無理でした。

また勉強やらなんやらでというより僕の執筆速度が遅いので

短いものを多く更新という形になってしまつようになるかもしれない
せん

が、よろしくお願いします

この作品、バカテスより全体的に優しくないか？と

自分の中に疑問をいだきはじめているのですがどうでしょう

それも教えていただけるとうれしいです

では、また次回に

僕と眠りと召喚獣

「明久、お前はここで少し待機だ」

そういつて雄二は、Fクラス連中（実質は僕もその一員なんだけど）のところについて何やら作戦会議を始めている様子

そうすると、みるみるうちにみんなの士気が高まっていく

すごいな、雄二は

『吉井をあの世の地の底に』

『吉井を人にしておくな』

『ぺったんこは、俺が守る』

なんだろう、このとてつもない危険な雰囲気は、いったい雄二はこいつらをどんな手を使ってまとめあげたんだ

しかし、今回のDクラス戦は、こちらに不利な状況ばかりだ

まず初めに、このクラスの最大戦力である湊がいないこと、そして数学ではBクラス並みの実力を持つ島田さんが

いないことだ。いくら雄二があバカどものFクラス連中をまとめたところで勝てる相手じゃないと思う

「なんだ明久。そんなに心配なのか」

さっきまで、向こうで説明していた雄二がいつの間にか隣まで来ていた

「いや、だってさ・・・今回の勝負勝てる見込み無いじゃん」

「そんなことは無いぞ。少なくとも負けることは無い」

自信満々に言い張る雄二。その自信はいつたどこから出てくるんだろう

僕は、こんなにも不安だというのに

「そっいや、島田と湊の姿が見えないな」

そっいわれて、クラスを見渡すと確かにさっきまでいた2人の姿がなくなっていた

「まあいない方が好都合だ。明久今からDクラスに行くぞ」

「う、うん。でもどうして?」

「まあいろいろと、な」

そっいわれて僕たちはDクラスに向かった

「今すぐ、死になさい。豚野郎」

Dクラスに入った僕を死ねという言葉で迎えてくれたのは清水さんだった

やっぱりきらわれているな、僕

「なにのこのこと美春の前に現れているのです？あなたにはしなければならぬことがあるでしょう」

自分のこぶしを力強く握る清水さん。

本当に僕はこんなところで何をやっているんだろうか。

本当だったら今すぐにでも、島田さんに謝りたいのに・・・

自分が情けない

「まあまで、清水。俺たちは試召戦争について話に來ただけなんだ。

」

「待てるわけじゃないじゃないですか。愛するものを傷つけられて・・・殺します今すぐ美春がこの男を」

「清水さん。少し待つてください。私も試召戦争のことなら聞かないわけにもいきませんので」

教室の奥の方で椅子の動く音がした。どうやら声の主はこの人らしい

「しかし、代表っ！」

代表？そうか、この人がDクラスの代表なんだ。

丁寧な話方だなあ。代表と言っても雄二とは大違いだ

そうして、その顔をみて僕は啞然とした

「みな・・・と？」

その顔は、まるでコピーでもしたかのように湊そのものだったのだ

「はい、私が花咲湊わたくしです」

「おまえ、なんでこんなところに」

雄二も驚きを隠せない様子

そりゃそうだ。ついさっきまでクラスの一員だった人がいま敵の代表になっているのだ

驚かないほうが、むしろおかしい。

「何でも何も、私はDクラスの代表ですのぞ」

「いや、だつてお前、え〜〜〜」

口調も、クラスにいた時とはまるで違ふ。自分のことを私なんて、いつもの湊なら言つわけがない

でも・・・案外さまになっているな。今度僕も自分のこと私つて

よんでみようかな？なんてね

湊だから似合うんだよね

「それで、試召戦争のこととはなんですか？そろそろ清水さんがゾンビ化しかけているので

「早めにしていただけるとありがたい」

あれ？　そういや清水さんはどこに？

「危ない、明久っ！」

シュン、ボツカーン

僕の目の前で何が起こったんだ！？

なにか、コンパスのようなものが向こうに少し溶けた状態で壁に激突してるけど

ハハハ、まさかね。いくら清水さんでもそんな人間を超えた技を繰り出すとは・・・

[illegible]

だめだ、もう自我すら保っていない。っていうかいつの間に後ろに回り込んでたの？

それにしても、よくあれが雄二に見えたものだ。

「ありがとう、雄二」

「DクラスがFクラスに宣戦布告した理由を聞かせてもらいたい」

あれ？僕の感謝の言葉はスルーですか

「FクラスはEクラスをあつという間に破ったそうで、そんなにつよいのなら

早くに倒しておいて損は無いですよ。負けたクラスは3か月間宣戦布告もできないですね

話はそれだけですか？それではまた午後に戦争の舞台でお会いしましょう」

僕たちはDクラスから追い出されてしまった

「チツどうしろっていうんだ。どうして湊がDクラスにつ！」

教室に帰った途端大声を上げる雄二

それもそつだ。多分雄二のことだ。どうにかして湊を戦場に駆り出せたら、あとはFクラスメンバーを

適当に使えば勝てると思っていたんだろう

「どうしたのじゃ、そんな大声で」

「……何があつた？」

雄二の奇妙な態度に二人も心配してきてくれたのだろう

「それがな……」

雄二は二人にDクラスであつたことをすべてはなした

すると、帰ってきた答えはあまりにも僕たちの意表を突いたものだった

「何をいつておるのじゃ？花咲湊は初めからDクラスじゃっただろ
う」

「……このクラスにあいつはいない」

僕と雄二は顔を見合わせた。どういうことだろうか？

「おゝいみんな少し聞きたいことがある。」

雄二は、この二人のイタズラかどうか確認を取ってくれてる見たいだ

『湊、あいつがこのクラスに、笑わせるな奴はわれらが仇敵だ』

『このクラスにいたら……』

『『『異端審問会の名において奴を死刑とする』』』

（それより坂本。さっきの話はどうなったんだ。よ・・・奴を・・・
けい・・・）

（ああ、当然だ。だが少しまっけてくれ）

雄二と話しているのは異端審問会の会長の須川君だったかな

その様子をみていると雄二がこちらの様子に気が付いてようであわ
ててこちらの方に歩いてくる

「だめだ。こいつら全員湊がDクラス代表だっと思ってやがる、い
ままでこのクラスいたこと自体なしにされている」

「どうしてこうなったのか、わからないの」

「いや、一つだけ心当たりがある。学園長が初めに言ってたことを
思い出せ」

「えーっと、なんだっけ」

「はあ、バカはこれだから困る。いいかこの世界っていうのは誰か
に操作されているんだ」

お前だって、現実で見ることができなかった召喚獣が見れただろう」

そう。僕たちは、クソババアの作った薬によって眠らされている

クソババアの薬を使った誰かに、っていうのが正しい言い方かな・・・
ん？

「そうかつ！」

そういうことだったのか、この世界を自由に操作できる人物が一名いるじゃないか

でもそんな、どうして？

「わかったようだな、でもそれにしては謎が多すぎるんだ。まだ断定はできない」

「じゃあ雄二、どうするの？」

「本当だったらAクラスの春風にもききてえところだがもう時間がねえ、試召戦争の準備だ。」

時計の針の短針が1になると同時に僕たちの二度目の試召戦争が始まった

初めに僕たちができるだけ多くの教師を教室に閉じ込めた。

時間稼ぎだ。そうすることで教師フィールドを展開されずに済む

なんで時間稼ぎをするのかはよくわからなかったけど、とにかく必要だったらしい

そして、僕はというと・・・

「何のようなのよ、吉井」

屋上でもっともそこで会いたくない人に会っていた

終結と受諾（前書き）

お久しぶりですね。
では、お楽しみください

終結と受諾

「島田さん……」

どうして島田さんがここにいらっしゃるって聞こうかと思ったけど、少し状態がわかってしまった。

多分、秀吉の声マネを使ってここに呼び出したんだ。
だから雄二は僕に試召戦争に加わらないで屋上に行けて……
どうしよう、まだ心の準備が……

「どうして、帰ろうとしているのよ。アンタから呼び出したんでしょ」

「いや……あのそれは……」

僕は何をしているんだ、これじゃみんなのしてくれたことが台無しになってしまう
そんな時

『お姉さまはそこにいるのですね、早くどきなさい豚野郎ども』

『ここから先、なにがなんでも通すわけにはいかねえ』

『そつだ、あいつらも今闘っているんだ』

『俺たちにだって守らなきゃならねえものもあるんだよ』

クラスメイトたちの声がドアの向こうから聞こえた。
はあ僕もバカだな。何を悩んでいたんだろう。

こんなに一生懸命動いてくれるみんながいるのに自分の弁明ばかり考えて

島田さんの方に向き直り、僕は素直に

「ごめんなさいっ！」

土下座した。

「フツッ」

不意にそんな声が聞こえて思わず顔を上げた。するとそこには笑った顔の島田さんがいた

「なに？土下座ぐらいで許してもらえとおもってるの？」

普段なら怖くて仕方ない場面だけど、今は、今だけはその言葉がうれしくてたまらなかった

「本当にごめん、島田さん」

・・・・・・

なんだか急にまた静かになった。心なしが島田さんがもじもじしているように見える

「ねえ吉井、うちのお願いを一つ聞いてくれる？」

「僕のことなら何でもするよ」

「うちに・・・」

「ようやく、上って来れました」

まさか、あのFクラスの軍団を一人で、信じられない。

息を整えこちらの方へ寄ってくる清水さん。

「お姉さま、どうしてそんな豚野郎のことがいいのですか？」

僕も、告白された時から思っていたけどどうして僕なんだろう。頭も見た目も性格もどれをとっても最低クラスの僕に何があるんだろうか

「あんな事まで、されたのに・・・どうして」

意を決したように島田さんは僕の後ろから清水さんの方へと歩き出した。

「美春、アンタはどうしてうちのことが好きなの？」

「どうしてってそんなの好きだから好きなんです」

「うちも同じなの、どんなにひどいことされてもしても好きになっちゃったもんは仕方ないのよ」

「でも・・・っ」

「清水さん、僕にも一つ言わせてもらえないかな」

どうしてだろう、なんだかこの二人の会話を聞いていたら勝手に言葉が出ていた。

別に言いたいことなんてあるわけじゃない、でもなんだか言わなきゃいけないようなものがあるようなそんな気がして

「なんですか、豚野郎と話すことなんてないですけど」

「僕もね、あんなひどいことしたあとだから対して説得力がないかもしれないけど、

島田さんのことが好きだったんだ。いつも元気で、明るくて、けどたまに見せるしぐさがかわいい
そんな彼女に惹かれていたんだ。」

「ふざけないでください。そんな見え透いた嘘。これ以上言ったら
ただじゃ済みませんよ」

「嘘なんかじゃないっ！」

多分、いままで生きてきた中で一番大きな声をあげたんじゃないだろうか

それと今、島田さんの受けた屈辱がよくわかった。本気で言っていることが嘘呼ばわりされたり

イタズラ呼ばわりされることがどれだけ悔しいかが

「僕は本気だよ清水さん。」

「はぁそうですか・・・」

清水さんは心の底からがっかりしたように悲しそうにして後ろを向いた

「では今回だけはFクラスの設備ランク下げで勘弁しておいてあげます」

『ピンポンパーンポン、試召戦争終結。勝者Dクラス』

ああ、雄二たちやつぱり負けたんだ。まあ仕方ないよね

「フンっ」

清水さんは身を翻して、屋上を去っていく

「ねえ、吉井」

げっ、島田さんのことすっかり忘れてた・・・

「今の本気・・・なの？」

うわー恥ずかしい。でもここで逃げるわけにはいかない

「本気だよ」

だめだ、もう限界だ。そろそろじらさないでよ島田さん。

「へーそうなんだ」

だめだ、完全にSモードにはいつちゃったよ。
でも、その気配はすぐになくなった。

「じゃあ、もう一度しっかりうちにいってよ」

「え？何を」

「もう、察しが悪いわね。うちが朝やったことを今度はアンタがうちに言うの」

えーっともしかして告白を僕の方からしろとおっしゃられるのですか？

いま、ただでなくとももう爆発しそうなのに

「いや、あの」

まじまじとした目でみてくる島田さん。向こうもまだかと待っているようだ。

もう、あんなときかれたんだしいいや

「僕、島田さんのことが好きです。付き合ってください」

「こ、こちらこそ・・・じゃあこれからはお互い下の名前で呼びましょ。」

ウチはアンタのことアキってよぶからそっちは美波ってよんでね」

「うん、よろしくね。み、美波」

「こっちこそよろしくね、アキ」

終結と受諾（後書き）

さてこれで恋愛パートも終了ですね。

次回からは何編にはいるのか、検討中です

また、いそがしくて更新が遅くなるかもしれませんが
よろしく願いしますね

カップル誕生（前書き）

ここまで駄文に付き合ってくれた方々本当に感謝しています
自分でよんでもひどい作品だと思えるようなものばかりでしたが
これもまた一つの経験。そう思って残りの話も暖かい目で見守って
いただけるとうれしく思います
では、スタートです

カップル誕生

パチパチパチパチ

突然の拍手。

一体誰だっ！こんな恥ずかしい場面を見られてあのFFF団に知らされても大変だ

すぐにでも、始末しないと・・・

そう思って音のなる方を見てみるとそこには、今現在謎の存在となつてゐるある男の姿があつた。

「みなと？」

「おめでとう、二人とも」

そういつて笑顔でこちらによつて来る彼に僕は目を白黒させたが、美波の方は特に変わった反応は無く

むしろ、ありがとうといつてふつうにお礼の言葉を返していた。

「いやゝほんとよかつたよ。イロイロあつたけど。それにしてもまさか両想いとまでは予想してなかつたよ」

本当にいろんなことがあつたな。

今回、美波と付き合うまでに誤解があつて、喧嘩して、最終的には恥ずかしい思いをして

まあ、今でもすごく恥ずかしいんだけど

「でさ、明久に島田。唐突でわるいんだが敵がきてるんだ」

一点を見つめながら言つ湊。その視線の先を追つてみるとそこには

雄二率いる、FFF団の姿があった。

「明久、悪いなこれがお前をまもった契約金変わりだ。殺れ」

雄二の最後の一言によって後ろにいる全員が僕たちの方に向かってくる。

こりゃすごい殺気だ。そんなに僕が他人と付き合うことがにくいんだろうか？

まあ、この連中からするとつらやましい限りの光景だろう

『俺は吉井の腕の骨をすべてへし折る』

『なら俺は、吉井の肋骨の骨を回復しないまでに折る』

『なら俺は・・・』

ははは、どれだけつらやましいんだろう、こいつらは

しかも、僕の体はつかまってしまえばこいつらに骨が見えなくなるくらいに砕かれるだろう

うん、そんな気がする

「なあ明久。もうおれたち囲まれてるぜ」

いつの間には僕の周りにはさっきまで僕の体のどの部分をどれだけ折るかで競っていたFFF団が

覆っていた。やばい、マジでやられる・・・目がもうそれだ

「明久、島田をつれてこの場から脱出できるか？」

「湊、どうするつもりなの？」

「俺が・・・こいつらの相手をする。その間に逃げるんだ。」

なんだろう、今一瞬詰まったような気がした。そのことをするのがまるで嫌みたいだ

普段から戦っているあいてなんだからなんてこともないだろうに

『調子に乗ってんじゃねーぞ、湊。今日の俺たちは一味違っぜ』

『そうそう、俺の体にはイチゴジャムが塗ってあるんだぜ』

『俺は・・・』

自分の体に塗りつけたジャムの味をいって止まらなくなるFクラスメンバーたち。

自分の体にジャムをぬって一味違っつてどれだけこいつらはばかなんだろう

ばくでも、その程度のことはいりかいできるのに・・・

「ちっ、なんてことだっ！」

えゝそこで怖気づくの？なんでえ

湊、君は賢いと思っていたのに・・・。いやまてよ、ジャムを自分の体に塗ったやつと戦っつて

確かに、いやだな。

「さあ明久に湊どうする？」

高々と僕たちを見下ろす雄二。その頭をぜひともDクラス戦の時に使ってほしかった。

その自信満々の雄二の言葉を打ち砕いたのは湊だった。

「はあ、坂本、お前は・・・。」

今までのがまるで演技であつたかのように余裕の湊。

「俺の正体でも確かめに來たのか？」

どういふことなのかまったくついていけない僕をおいて雄二は、
やっぱりなと薄ら笑いを浮かべていた。

「そいつらはもう用済みだ。好きにしろ」

湊のことで何かを得たのか、にやにやとわらいながら屋上から去る
雄二。

その傍らで湊もやっぱりそれが目的か・・・とつぶやいている。
なにがなんだか、さっぱりわからない。

「わるいな明久。俺はこのゲームからは退場する。じゃあな島田と
うまくやれよ。」

えっ！？なにこの状況で僕を放っておく気？めちゃくちゃだよ。っ
ていうかどうやって退場するの

そんな疑問を与える間も無く僕の周りから、さっきまでいたFFF
団と花咲湊という存在は
跡形もなく消えていた。

そして、また僕と美波の二人きりとなった。

カップル誕生（後書き）

少し急展開すぎましたかね？どうでしたでしょうか
ついてこれましたか。僕が読者ならついていけないかも・・・
それでは、また次回に

長い月日の経過そして・・・（前書き）

しばらくの間ご無沙汰しておりました。

読む方に専念していたため少し遅くなりました。

自分でハードルはあげたくないのに、読んで洗練されたわが実力を
みよ

・・・冗談ですw。まだまだへたくそですが、よろしく願います

長い月日の経過そして・・・

僕が美波と付き合いだしてから、約半年の時が過ぎた。

あの一軒以来この眠りの世界とも呼べる世界から、花咲湊という存在は完膚無きにまで消えていた。

だれも、その存在を覚えていた者はいない。僕を除いては・・・。
あれ以来僕は毎日のように、ドキドキの日々を送っている。今日もその一日の幕開けだ

『吉井、お前みたいなリア充がいるから俺は・・・』

『血祭りにしてやる。さあ走るのをやめるんだ』

冗談じゃない、走るのをやめたら殺されるのは確実。

美波と付き合いだしてから、僕は、ほぼ毎日死と隣り合わせというドキドキの日々を送っている。

それは今日も例外ではなく、わずか数分でつくような通学路の中で、僕の処刑は始まっていた

その処刑を避けるべく逃げているさなか、女の子の可愛い声が聞こえてきた

「アキ〜」。

「やあ、おはよう美波。そしてここから逃げるんだ。」

声をかけてきたのは、僕の彼女である島田美波。

お互いすっかりこの呼び方にもなれ、そして美波はこうして僕が襲われていることに違和感をなくしている

「うんうん、平気。アキが守ってくれるもの」

ごめん、美波。僕はこの気の狂った連中から君を守れるほど強くは無い。まあでも助かった。美波が来てくれたなら

多分こいつらも僕には手を出してはくるまい

安堵する気持ち顔にも出たのだろうか、僕を襲ってきていたFF F団は僕に鋭い殺意の目をむけて

『見せつけやがって、覚えておけよ』

『『必ず殺す』』』

いつもこんな感じで美波のような女子が来るとあの連中は撤退していく。とても不吉な言葉を残して・・・。

悪魔で女子に悪いところは見せたくないようだ。

これが最近誰もが見る光景と化していたから恐ろしい。こんなに毎日ドキドキしながら生活しているのも僕だけじゃないだろうか・・・。

「ねえ、アキ。今日が何の日だか覚えてる？」

何の日？今日は何か特別な日なんだろうか？思い当たる節を頭の中からよみがえらせようとするが

全く思いつかない。しばらく考えたがその答えは出てこなかった。

「ごめん、僕にはわからないや」

「新しいクラスが来るんじゃない。たしかクラスはZだったかしら誰が入ってくるのか楽しみよね」

「え・・・Zクラスだって。」

「そうよ、なんでそんな顔するの。そんなにうれしいわけ？」

「そりゃもう、当然だよ。」

ははは、これで僕らもはれて自由になれる、そうとなればさっそく春風さんに連絡して

Aクラスでたたいてもらおう。あ、でもAクラス代表は霧島さんか、なら雄二がいるから問題ないね。

こんな生活とはやっとおさらばだ。もしAクラスが負けたとしても僕たちFクラスも初めとは比べ物にならないくらい強くなった。Aクラスと肩を並べるほどだ。

もうB、Cクラスなんて目じゃないほどに。この半年、はじめに雄二が言ってた通りのように僕たちFクラスは

進化した。ということはこの情報は雄二の耳にも・・・
とにかく雄二と相談しなくちゃ

「ごめん美波、少し用事を思い出しちゃった。先に学校に行つてくれる？」

「別にいいけど・・・何？うちには話せないことなの」

別に話せないようなことじゃないけど、今ここで僕がZクラスのことを話してしまうと何だかややこしくしてしまいそうな気がする。

「ちょっと、ね。ごめんね。またあとで」

そういつて美波から僕は遠ざかり、雄二の家を目指した。

数分後、学校を霧島さんと一緒に目指す雄二と出会った。

「かくごしろ雄二、骨も残らぬほど粉々にしてやる」

「ま、まで明久。これにはいろいろと事情がだな。それに見ろこの手錠、どう考えても仲良し登校じゃねえだろ」

「そんなこと知るかっ！くたばれ雄二い」

「そんな直線的な攻撃効くかつ、よつと」

ちっかわされてしまったか、だが甘いつ

「ふん、それだけだと思っな、やれっ！わが同胞たち」

僕を追ってきていた連中がみるみるうちに雄二を囲みミンチにしている

ははは、見たか雄二、これがFクラスの實力だ。

その後雄二を血祭りにあげ満足したらしい連中は僕のことなど一切忘れて新たなカプルのもとへ

走っていった。

「で、何のようなんだ明久。まさかおれが翔子に強制連行されてたことなんて知らないだろ」

「そうだ、雄二ももう知ってるよね例のクラスのこと」

「当然だ、それについて今翔子と話していたところだ。あとこの手錠も」

「そうか、それで霧島さんと一緒にいたのか。さすがに手回しが早いな。」

「霧島さんもいい子だな。雄二と一緒にいるために手錠まで持ち出すなんて。雄二は幸せ者だ」

「で、どうするの？」

「どんな実力かわからない以上、どうしようもない。一度試召戦争で負けちまうと三か月間宣戦布告ができねえ」

「Aクラスをはじめにけしかけるのは不味いだろ。だからと言って俺らFクラスもそこそこ強い。」

「それにB、C、Dはあの事実を知らない。だからあえて挑もうなんてことはおもってはくれないだろ」

「あの事実っていうのは、Zクラスを倒すと眠りから覚めるというはじめ学園長に言われたことだろう。」

「多分、だれも今自分は現実で寝てるなんて思っちゃいない。僕もできれば知らないままがよかったなあ」

「じゃあ、どうするの？」

「どうするも、こうするも打つ手だてがねえんだ。とりあえずノックラスとやらの連中をみてから決めるさ」

「そうだね、どうせもう、半年近くいるんだもん、慣れちゃったよ。別に来た当日に倒さなきゃいけないこともないしね。」

「……何の話？」

話についていけないのか、質問をしてくる霧島さん

「気にするな翔子。いずれわかることだ。」

せつかく話に興味を持って聞いてくれているのに冷たい奴。まあここで変に事実を知って誤解されるよりまし

「じゃあ、行こっか」

「やあ、吉井君に坂本君。久しぶりだね。半年ぶりくらいかな、僕のこと覚えてる？」

「雫さんじゃないか？どうして今頃、っていうかどうやって来たの？ココってそんなにやすやすと出入りできるところじゃないよね」

「あれ、もしかしてまだ気づいてなかったの。まあいいや気付いて

ないなら教えてあげない」

「なんで、ひどいよ。」

そこは、教えてくれるところじゃないの？

「坂本君はもうわかつちやった？」

そういわれて僕は気になるあまりすぐに雄二の方に顔をやった。

「あゝ大体な。」

「わかったなら教えてよ、雄二」

「い・や・だっ！」

「そんなに全力で否定しなくても」

「お前には今朝の借りがあるからな、今日はお前の特になりそうなことは片っ端から潰す」

「まだ、根に持ってたのっ!？」

なんて恐ろしい男だ。僕に今日幸せは訪れない。雄二が潰す。なんか本当にやってきそうだ。

「じゃあ、またあとで」

雫さんは手を振って学校の方に走っていく。

「俺たちも行くぞ、今日は少し忙しくなりそうだ」

長い月日の経過そして・・・（後書き）

文章はうまくなっていたでしょうか

へたくそになっっていないことを祈ります

そろそろ、出していたいたキャラクターを出せるときが来たよう
です

うれしいです。ただお気に召していただけるかは心配ですね
また次回にお会いしましょう

圧倒的・全滅Aクラス

「どうだい、引つ掻き回した後の2年の状態は・・・」

「あまり、面白くない状態じゃないな。このままじゃ多分みんなZクラスに踊らされて終わりになってしまう。」

「あたしとしちゃ、その方がありがたいんだけどね。去年はそんなに異常な奴がいなかったからそんな事する必要もなかったんだけどね、今年は3、いや4人も異常者がいるんだ。去年も大概のつわものをZクラスとして送り込んだつもりだったが高城にボロボロにされてしまったよ。」

「その高城という人はどれほどの人なんだ？」

「何を考えてるかわからない、ちょうどあんたみたいな奴だったよ。それに言ったこととやっているところが矛盾しているところもそっくりだ。あんた何もてを出さないとか言っておきながら設定はいじるし、吉井には余計なことするし
アンタたちはどういう神経をしているんだい」

「まあまあそう怒らないで、それで学園長。俺もう一回あっちに戻りたいんだが・・・」

「やめておくれ、あんたがいったらまた・・・いやいいだろう。戻ってきたな」

「なんだ、大した自信だな」

「まあね、今回は前回の失敗をいかして、Zクラスは無敵クラスとよばれるゲームというチートレベルのメンバーを集めたからね、あんた一人対Zクラス二人が渡り合えるのがせいぜいと言ったところだろうよ」

「言うじゃないか、まあ俺が全面的に手出しなんかはしない、そんなことをすればあつという間だ。」

「生意気言ってくれるじゃないか、クソガキ。自分の目で見てくるといいよ、あんたが手出したところで勝てるレベルじゃないからね」

「一つだけ確認したいことがある。Zクラスの出現の時間っていうのはあらかじめ半年後と決まっていたのか？」

「そんなわけないさね、あいつらの勝手な行動さ。まあその行動に合わせてクラスを出したのはあたしだが」

「そうか、それならいい。じゃ行ってくる」

「せいぜい、踊らされてきな、手筈^{てはず}はしておいてやるよ」

「ありがとございます。吉井はくるわせたままでよろしく」

「よろしくじゃないよ、まったく」

僕が文月学園についたとき、その隣にもう一つ大きな学校が増設されていた

もう何でもアリだなあ〜一日で学校が建てられるわけないのに・・・

「明久、あれがZクラスの校舎だ。学校ひとつ丸々が校舎なんていいご身分だな」

「そのZクラスに勝つたらこの世界からでなくちゃいけないっていうのも残念な話だよ」

あのクラスにかてたなら、のこりの時間くらいずっととどまっていきたいよ」

「・・・とどまる？」

僕たちの話を聞いていた霧島さんが少々疑問を浮かべ始めたようだ。まあそうだよなこれ何も知らない人が聞いてたら

意味不明だもんね。

でも、この話題を霧島さんにしてしまうと・・・いや待てよなんで僕はこんなにも他人に事情を知られるのを

嫌がっているんだろう。別に霧島さんはそんなに大きな反応をしてみんなを混乱させるマネはしないだろうし

別に言ったっていいんじゃないだろうか

そう思っていた矢先

「やめとけ明久。それをしたら俺が死ぬぞ」

ははは、なんて愉快なんだ。その事実を知るだけで雄二が死んでくれるのならこれは伝えなくちゃならない

これは、僕に課せられた使命だ。

「ねえ、霧島さん、実は・・・」

「なあ、明久。俺が死んでしまうつていうの聞いていたよな」

「わかった、わかったから、その手を収めて雄二」

どうして、そこまでむきになるんだろう。それになんで死ぬにまで発展するんだ？

「わかってもらえて俺はうれしいぞ、明久」

仕方ない、あとでこっそりと言っておくか。

「今日、俺は明久の幸せを潰すだけで済ますことができるだろうか・・・・？」

やっぱりやめよう。そうだよね人が死ぬって言っているのに進んで殺そうとすることはよくないよね

殺人はんたゝゝい

「おゝいおぬしら、何の話をしておるんじゃ？」

「これから、どうやって明久をむごく殺すかの話し合いだ。」

「何言ってるのさ雄二。その中にぼくが入っていたらまるで僕がとてつもないほどひどいMに聞こえるじゃないか」

「その通りだろ」

「相変わらずじゃのう」

キンコーンカーンコーン

「やべっ遅刻じゃねえか、急ぐぞ」

あさからの鉄人の地獄の授業が終わりやっど昼休み。

最近僕たちは昼休みになると屋上に行くことが多い。弁当を食べるときもいつも屋上だ。

僕と美波の運命の場所とでもいうのかな。なんだかあのころが懐かしいよなっ

そして、今日も雄二、秀吉、美波、ムッツリーニ、霧島さん、と一緒に弁当を食べながら作戦会議を行っていた。

「Zクラスどうやって潰すか」

「なぜ雄二はそんなにZクラスを倒すのにこだわっておるのじゃ？」

「俺は明久と違って設備がほしいんだ。あの新しい校舎見たらう。」

あの校舎全部が俺たちのものになるんだ。

倒さない手は無いだろう」

まあ、雄二にしてはうまいかわし方だけど、なんだかそれだけじゃない気がする。聞いてみるか

「何があつたの雄二？」

「実はさっき、Zクラスを倒さなければ結婚と翔子に脅された」

ああ、そういうことだったんだ。

「ムツツリー二、なにが情報はあるか？」

「・・・まだ何も得ることができない。あの校舎セキュリティが堅い」

「ムツツリー二でも調べられないほどのなのか、相当守られてるな」

「・・・すまない」

「なーに謝るほどのことじゃない。大体そうなるだろうと思っていたしな」

「それと雄二よ、一つ聞きたいことがあるのじゃが」

「なんだ、秀吉。いつてみる」

「いや、さっき実はな、妙な噂を耳にしてな。」

うん？なんだか嫌な予感が・・・

「実は自分たちは眠っているとかどうとかというものなんじゃが」

やっぱりか、別に流してもどうとなるわけでもないし、秀吉みたいに特に何とも思っていない生徒がほとんどだから

いいけど、誰がそんな事したんだろう？できるのは僕、雄二、春風

さん、雫さんの4人だけだけど・・・。

雄二は多分違う。変な言い方かもしれないけど今日はずっと一緒にいた。

問題は、春風さんか、雫さん。可能性が高いのは雫さん、か。今日見たばかりで起きていることだし

さて、雄二この場はどうする？ちらつと見てアイコンタクトをとると雄二はいい機会だ。もういつそのことばらしてしまうといった感じの返事をしてきた。大丈夫なのかな？

「その噂は本当だ。信じてくれ。」

一瞬みんながうろたえたように見えたが結構あっさりと受け入れてしまった。

なんか、みんな柔軟に対応するな。意外だった。もつとあたふたするかと思つてたけど・・・

それに加えて、Zクラスことについても説明できたから、好都合だ。なんだもつと先に言っておけばよかったな

でも、この事実を知られたら雄二死ぬんじゃない・・・

「・・・雄二、眠りの世界ならなにをしても許される」

「頼む、それだけはやめてくれ。まじで頼む」

「・・・そんな真剣に、ひどい」

「いや、そういうつもりじゃ・・・」

やっぱり霧島さん相手だとたじろいでいるな雄二のやつ。まあ死ぬ理由は痛いほどわかった。

これはもう、僕も加勢するしかないな

「行くぞ、ムツツリーニ。僕たちの必殺コンビネーション。撲滅殺戮アタック」

「本気で殺意を浮かばせる名前じゃな」

「となりから冷静に解説してないで助けてくれ、秀吉」

「すまぬ、最近この光景に見慣れていたのでつい……おい明久、ムツツリーニそれに霧島もやめるのじゃ
これでは、対Zクラスの話ができないじゃろうが」

「チイ命拾いしたな、雄二。」

「そ、それでだな、Aクラスにわるんだが模擬試召戦争を申し込んできてもらいたいんだ。」

「なんで、Aクラスに申し込ませるの？別に、というよりAクラスよりすこし弱めのFクラスの方が実力を
はかるには好都合だと思うんだけど」

「いや、俺たちのほうがAクラスよりも確実に強い。あいつが多分かえってきているからな。その確証が俺にはある。だから翔子。頼まれてくれないか」

「……雄二の頼みなら何でも聞く」

霧島さん、純粹でいい子だな。なんでこんなにいい子なのに雄二は付き合わないんだろう。

僕に雄二の考えていることはまったくわからないなあ」

「じゃあ、今日の午後から開始で頼む。俺たちも授業が終わり次第
すぐに見に行く」

「・・・わかった」

午後の授業がようやく終わって僕たちは急いでAクラスに向かった。

まあ、Aクラスはあの霧島さんも姫路さんもいるくらいだから簡単
には負けないと思うけど

Aクラス霧島翔子 VS Zクラス黒宮雫

化学 0点 498点

Aクラス姫路瑞希 VS Zクラス雪煉^{せつれん}総真

英語W 0点 227点

Aクラス久保利光 VS Zクラス村上風鈴

古典 0点 318点

Aクラス工藤愛子 VS Zクラスいざよいみれん十六夜美蓮

保健体育 0点 192点

Aクラス佐藤美穂 VS Zクラスそらほしあかり空星紅璃

現国 0点 299点

「何が起こっているんだ……」

僕は言葉を失った。そんなまさか、だってあのAクラスだよ。学年最高成績者の集まりで、僕たちもようやく追いつけたようなそんなレベルの人たちが、ここまでアッサリと……

「あはは、かつちゃったよ。」

「はゝ、くだらねえ」

「完璧なる勝利だ」

「わーい、かつたよ」

「むゝゝゝ」

「おい、あいつらあの時同じクラスにいた奴らじゃねえか？」

一番先に我に返っていた雄二が驚愕の事実を吐いた。僕も思わずそ

の顔を見してみる

「雫さん？」

「やあ、来てたんだ吉井君に坂本君。」

「どうして、雫さんが？」

「まだ気づいてなかったんだ。それじゃあ改めてここにいるメンバーだけでも自己紹介しておこうかな
僕はZクラス代表黒宮雫ヨロシクね」

「俺は、雪煉総真だ」

「俺は、村上風鈴」

「私は、十六夜美蓮だよ」

「空星紅璃」

「ぼくたちがZクラストップ5人。ぼくたちZクラスは宣言する。
君たちを、あと半年間この眠りの世界から脱出させないッ！」

圧倒的・全滅Aクラス（後書き）

どうでしたでしょうか？

えっなになに面白くない。

マジですかい？ここ結構見せ場なのにw
もっと面白いの考えてきますっ！！

2クラスメンバーキャラクター紹介

- 1 名前、雪煉 せつれん 総真 そうま
- 2 得意科目、数学
- 3 性格、クール
- 4 その他特別な口調など、他人と関わる事を嫌う 口癖は「くだらない」

- 1 名前、空星 そらほし 紅璃 あかり
- 2 得意科目、古典、物理
- 3 性格、マイペース
- 4 その他口癖、口癖は「ほにゃ？」

霧氷様より

- ? 名前：村上 風林 むらかみふうりん
- ? 得意科目：理数系
- ? 大体の性格：用心深い。
- ? その他特別な口調：女性恐怖症。口癖は「めんどい」
- ? キャラ名：十六夜美蓮 いざよいみれん
- ? 得意科目：文系
- ? 大体の性格：基本的に純粋。
- ? その他特別な口調など：相手の話し方を真似る。

フレイム様より

まさかの展開っ！？（前書き）

サブタイトルがだんだん手抜きになってきましたが許してください
さてでは、お楽しみください

まさかの展開っ！？

「あんまり、調子のいいこと言わないでほしいな」

僕が呆氣にとられていると後ろの方から声がした。

一体誰だろう？。こんなところに来るのは僕たちくらいだと思っていたけど・・・

「誰だい、君は？」

「もう、忘れられたのか。悲しいな」

この声、聞き覚えがある声だ。半年前忽然と皆の前から姿を消した友人の声。

「そうか、確か君もいたね。あの場所に」

「思い出してもらえたようで、なによりだ。」
振り向くとそこには花咲湊が立っていた。

「どうして、湊がここに。君は確かあの時にゲームから降りるとか何とか言って」

「なんか、向こうも退屈だったんで戻ってきた。それにしてもひどいやられようだな。予想以上だ。」

この状況を見ても、余裕を崩さず入れるなんてすごいな。その場で立ち尽くすしかできなかった僕とは大違い

「なんで、そんなに君は動揺しないのかなあ？そのメンバーは今にも腰が抜けそうな勢いだったのに」

湊は、本当に意味不明だなあ。半年前にどっかに姿を消しちゃうし、そうかと思うと今になって戻ってきたり、いったいどうなってるんだ。もうわけがわからないよ

「予想以上とはいっても所詮はやはり人間か、と思っただけさ。アంతたちなら多分半年は持たない。」

なんで、そんなに強気なの？たしかに湊一人だけならいけるかもしれないけど、僕たちじゃ戦力外。

それに霧島さんと戦った後であの点数だ。いくらなんでも無茶なんじゃ

「じゃあ、この場で勝負する？」

「俺とやってもいいけど、その前にテスト受けさせてくれ、出した瞬間鉄人にさらわれる」

つまり今の湊は無得点ってことか。まああれ以来学校着てなかったし当然かな。

「大した自身だね。いいよ、テスト受けてきなよ。ぼくはここでもっている」

なんかそれにしても、雫さんすっかり悪役っぽくなってるな。というよりその役を楽しんでるって感じかな

言っちゃだめかもしれないけど、小柄だしどちらかっていうと小悪魔って感じがする

「それじゃあ、行きましようか西村先生。俺がテスト受けるからテスト監督よろしくです」

「はあ、俺は0点になった者の補習を行いに来ただけなんだが、まあいいだろう。どこで受ける？」

おお、鉄人いつの間につ！？

「そうですね、どうせならここで受けましようか。なんか設備よさそうだし」

いつでもどこでも湊はのんきだなあ。まあ僕もそうか

「じゃあ、何の教科にする？」

「ぼくに決めさせていいの？じゃあ物理にしようかな。得意教科だし」

「いいんだよ、苦手教科でも」

「ぼくきみのことあまり好きになれないな」

「悪かったな」

え、どうして苦手教科の方がいいって言って嫌いとか言われるの？普通苦手教科選択するでしょ。

「じゃあ、お言葉に甘えて、英語のライティングにしようかな、あと僕ももう一度一緒に受けなおすよ。」

「別にかまわない。それじゃ西村先生よろしく」

「すこし、待っている」

しばらくしてから、鉄人がもどってきて試験はスタートした

「それじゃ、まあ採点も終わったことだし始めるよ」

「いつでも構わない」

「本当に生意気だね。一瞬でその余裕打ち砕いてあげるよ。試験召喚^{サモ}」

「試験召喚^{サモン}」

その言葉を合図に教室に二体の召喚獣が現れる。

湊の方は、本人そっくりにイケメンで、装備は白のスーツ武器はもってない。それに対して雫さんは

巫女服に弓とかわいらしい召喚獣だ。そして召喚獣の上に点数が表示される

Fクラス 花咲湊 VS Zクラス 黒宮雫

英語 W

689点

678点

二人とも、同学年だよね？年齢偽ってないよね？

「へえ、なかなかやるねえ、点数で勝てないなら仕方ないなあ、トランスフォーメーション」

トランスフォーメーションというのを合図に雫さんの腕にかかっていた腕輪が光りだした。

トランスフォーメーションって何？なにかの合体技？

その光に包まれたかと思うと、次の瞬間に雫さんは倒れていた。

「何があつたんだ？」

思わず雄二もほおけた顔をしている、それに対して向こうでは

「帰ってもいいか？」

「むっ、明るくて眠れない」

「めんどくせーな。さっさと負けて帰ろうぜ」

「そんなこと言っちゃだめだよ、せっかく代表さんかつこいいこと言っただのに」

「ここで負けても文句ねえだろ。どっからどう見てもあの腕輪がなけりゃ負けてんだぜ？使わねーでまけて帰ろうぜ」

「うるさい」

「くっだらねえ」

意気揚々と会話をしている。いつの間にあんなに仲良くなったんだろっ？

「そう来るか、なかなか厄介だな。」

湊が全てを理解したような顔をしながらずいぶんとはつがわるような顔をしていた。

一体何がわかったんだろう。湊と同じところに目線を落としてみると、そこには二体の召喚獣が戦っている。

「動きが遅いよ……どんどんかかってきなよ」

「召喚獣がしゃべってるっ!？」

「明久、トランスフォーメーションの意味って知ってるか？」

「雄二僕をバカにしているの。そんなのアニメに出てくる合体の合図のかけ「転身だっ!」はいすいませんでした」

「転身、つまり今闘っている召喚獣そのものが変ってわけだ。」

「どおりで、点数がひらいているのに余裕だと思ったよ。でもそんなことしたらもし攻撃があたったとき痛いんじゃない」

「そりゃ通常の人は何倍もの点数になる召喚獣の攻撃を受けるんだ。」

並大抵の痛みじゃない。だが操縦するのと違って自分が動くとなれば、操縦してるよりも確実に動ける。あの点数さじゃあたりもしないだろう」

雄二の言っていることはまさに的を射ていた。召喚獣の様子を見ていても、どんどん湊の点数は減って言っているが一向に向こうの点数は減っていない

Fクラス花咲湊 VS Zクラス黒宮雫

英語W 403点

678点

「さっきまでの余裕はどうしたのかな」

「なんか、ここは負けておこうかと思っただけ、何だかいらっとするから君たちが俺たちにどうにかここにとどまってくれと乞う姿でも拝ませてもらおうかな」

その言葉と同時に湊の召喚獣は今までにない俊敏な動きを見せた。自分で動いている雫さんの攻撃をことごとくかわし、隙を狙っては一撃、また一撃とどんどん命中させていくそれに伴って、雫さんには痛みもあるのかだんだん動きが鈍くなっていく。

何があって一体こうなったんだろう？

「明久、湊の目を見ても」

雄二に言われるままに湊の目を見みると、驚くことに湊は目をつぶっていた。

「どうして、目をつぶったままで闘うことができるの?。」

「さあ、そこまではわからねえ。でもこうなるとあとは時間の問題。俺たちは帰れるかもしれねえぞ」

「本当につ!?!」

「だって代表はあいつなんだろう?だとしたら倒した時点で俺たちの勝ち。この世界とはおさらばだ。」

「さて、しめと行くか」

湊の召喚獣は、懷に手をやり一本のバラを取り出した。

「まずいね、でもこっちもプライドがあるんだっ、出てきて早々ホイホイと負けるわけにはいかないんだ」

「そりゃ残念だ。出てきて早々退場でよろしく」

決着がついた

Fクラス花咲湊 VS Zクラス黒宮雫

英語W 83点

0点

「「「「「おっしゃ〜〜」」」」」

まさかの展開っ！？（後書き）

あゝ今回もグダリ感が満載ですね。

もうそろそろ終わりですかね、どうでしょうか？

終わってほしいのなら終わりますし、終わってほしくないのなら
終わりません。教えてください。どっちがいいか

つかの間の喜び（前書き）

お久しぶりです。

では、素人じみた文章ですが、どうぞご覧あれ

つかの間の喜び

「俺たちの勝ちだ、さあどうする？Zクラスの代表さん？」

「・・・・・・」

よほど負けたことが悔しかったのだろうか、雫さんは何も話そうとはしない。

ただただ、天井を見上げていた。

「もう言葉も出ないのか？」

「まあもう、勝つことはできないけど・・・」

次の瞬間、僕は目の前で何が起こったのかわからなかった。雫さんが何かを言ったまではわかった、でもその次に起こったことが何か今でもまだ呑み込めずにいた

Fクラス花咲湊 VS Zクラス黒宮雫

英語W 0点

0点

「ねえ雄二、なにがあったか見えた？」

「はつきりとは見えなかったが、黒宮の召喚獣が突然爆発してその爆発に巻きこまれて湊の点数も0点になったって感じた」

「でも、0点になった召喚獣が動くなんておかしいよ」

「ああ、普通ならそうだろうな、だがあいつならそれも無理じゃないのかもしれない」

そついつて、雄二は雫さんの持つ腕輪をさした。

「あれがあれば、0点であつても召喚獣は動くだろ？」

もし雄二の言うことが本当なんだとしたら、雫さんはどうなったんだ？爆発したんだとしたらもしかしたら・・・

「大丈夫だ、あいつもそれくらいわかってるだろう。それより考えるのはこれからだ。今回の件でもうあいつらは油断なんてことはしねえだろう。まあ向こうの連中を見ている限りはどうなるかわかんねえけどな」

「たしかに。なんだか向こうの人たちふつ々に帰りがつてたし」

さっきの会話を聞く限り、別にこのゲームの件は何とも思っていないだろう。ってなんだかはじめに聞いてた重い話とずれてきたな。まあ別に苦労しているわけでもなければ命がけでもないし、もともと考えすぎだったのかも

「はゝ、ずいぶんと手の込んだ悪あがきだね。そこまでの義理が君たちにあるとは思えないけど」

湊も爆発には予想外だったのか、少々驚いた顔をしていた。それは向こうにいた面々同じよう

さっきまで言っていた言葉を後悔するような顔をしていた。

「あゝ良かった。出てきてそうそうにさようならなんて冷たいこと

言わないでよ。おかげでいきなり最終手段だよ。

まあ、そういうわけで今回は引き分け、君たちの勝ちではないから
出させてはあげないよ」

こうして、つかの間の喜びは去っていった

つかの間の喜び（後書き）

今回は少し短めの投稿です。

次回からは、お泊り勉強会編です。美波と明久が一つ屋根の下で数日を過ごす……。さあ、それに対して雄二やFFF団の動きは。そして、勉強会の成果は出るのでしょうか？

まあ、そんなわけで、また次回お会いしましょう

さあ、これから勉強会だ（前書き）

お久しぶりです。↑毎回言ってる気が・・・
では、お楽しみください

さあ、これから勉強会だ

「ねえ、雄二」

「ん、なんだ」

「どうして皆が僕の家にいるのかな？」

あの引き分けから1週間が過ぎて、雄二と湊の提案で僕たちは勉強会を開くことになった。

メンバーは、僕、雄二、美波、ムッツリーニ、霧島さん、湊、秀吉だ。

・・・まあそこまではよかったんだけど

「僕の家でやるなんて聞いてないよっ！」

「そりゃそうだ。俺たちも今決めたんだからな」

なんて言う理不尽な。

「どうせなら、霧島さんの家とかの方がいいんじゃない？ 広そうだし・・・」

「・・・私もそうだったんだけど、雄二がどうしても吉井の家がいいって」

「雄二、そんなに僕のことか」

「ちげえよ、翔子の家にはいろいろとあるんだよ。俺専用の檻付き

の部屋とか俺専用の鎖とか」

ああ、なるほど。まあでもそれにしても僕の家っていうのは無いんじゃない。僕にだって守らなきゃならない

プライバシーってもんがあるわけだし。それに今ちよっと部屋をのぞかれるっていうのは・・・女子にとって危ないものが落ちてないこともないかもしれない。

「まあ、気にするな。別にお前の部屋をどうこうしようってわけじゃねえ。ただ環境として親もいないし、皆が気楽に勉強ができる場所ってことなだけだ。まあそれ以外に興味を持つやつもいなくはないかもしれないがな」

そういつて、雄二がさっきからずっとそわそわしている美波の方に目をやる。

そう言えば、美波が僕の部屋に来るのって初めてだったわけ？遊ぶときはいつでもどこか出かけることが多かったから

そんなことわからなかったけど、もしかしたらそうだったかもしれない。

「みんな、先週のことによくわかったと思うが、Zクラスは相当に強い。湊でようやく互角のレベルだ。」

確かに、両方ともすごい点数だった上に操作能力も向こうに関しては、自分が動くのだから相当うまい。アレについていけた湊も湊だけど、あんなのがそろそろいるのがZクラスなんだとすれば勝ち目はかなり薄い。まあだからこそ今回の勉強会なんだけど・・・

「そこでだ、俺たちは総合じゃ奴らにはかてねえ、だとしたら得意な教科一教科だけで勝ちに行くんだ。ムツツリー二だったら保健体育。秀吉なら古典。島田は数学。明久は歴史。とまあこんな感じだ。

「なんだ、トイレか？明久」

「いやゝもうそろそろしんどくなってきたから、皆の邪魔にならな
いように夜ごはんの準備でもしようかと思って」

「それは、ありがたい。なら俺もその準備を手伝おう」

「いいよ、雄二は霧島さんとゆっくり勉強してて」

「そんなに遠慮をするな、俺が手伝ってやるって言っているんだ。
好意は素直に受け取るべきだぞ」

「・・・雄二、婚姻届まだ書いてない」

「畜生、まだもってやがったのか」

いつから、これやってたんだろう？本当にべんきょうしてるんだろ
うか？まあこの二人は学力もすごいしいんだけど

学力がすごいといえば湊はどうしているんだろう。きっとしっかり
勉強しているんだろうな。さっきから一言も声が聞こえなかったし、
そう思っ湊の方へ目をやろうとするが、彼の姿はこの部屋には無
かった。

どこに行っただろう？まあトイレかなにかだろう。とりあえず僕
はキッチンに向かって料理を作り始めた。

今日作るうと思っっているのはパエリアだ。僕の好物で以前雄二たち
にも好評だったし、材料もそろっていたから夜ごはんにはちょうど
良かった。

しばらくたって、あとは鍋で加熱するという段階まで来たところで、
皆が匂いにつられてこちらの方んやってきた

「いい匂いじゃのう。ほう、パエリアか」

「・・・準備がいい」

「そういえば、アキの手料理もはじめてかも・・・」

皆、口ぐちに感想をいいつつ流れるように席についていく。まあ雄二と霧島さんはまだいろいろと勉強しているみたいだけど。そんなことをしているうちに出来上がった。さてとじゃあ僕も席について食べようかな

僕が席につこうとしたときに湊も匂いにつられてかあらわれた。

「明久の家いいな。バ・マン全巻とベル・ばぶ全巻読ませてもらった。スゲー面白かった、っておお、パエリアじゃん
おいしそう。これ明久が作ったのか」

「そうだけど・・・湊、君はなんで僕の部屋で漫画よnderの？」
「ココって勉強するために来たんだよね？」

「いや、明久がどんな趣味しているのか見に行こうと思ったら、買うのめんどくさくて途中だったバ・マンとベル・ばぶ
がおいてあったからつい」

「ついじゃないでしょ、勉強してよ、まったく」

湊は何がしたんだか、まったくわからない。

「じゃあ、食べよっか」

こうして、皆（雄二と霧島さんをのぞく）で食事をした後もう一度少し勉強をした。そして時間が過ぎていき時刻は

8時になっていた。

「そろそろ、お風呂にしようか」

「ああ、（ゼエゼエ）それが・・・いい。ハアハアみんなも・・・さぞかしつかれていることだろうからな」

疲れているのは多分雄二だけだと思うよ

「でも、うちの風呂はそんなに広くないから一人ずつ入るってことで、まずは最初に女子がそのあとに男子のほうがいいよね」

「ああ、そうじゃのう、ではワシはあとということか」

「何言っているのさ秀吉。君はあっちでしょ。」

「待つんじゃ明久、ワシは男じゃ」

「あっちに混ざってこい秀吉。このままだとムツツリーニが失血死してしまう」

「むゝ納得できんがしかたないのう」

秀吉は僕らの方で入ることを諦めたようで、向こうの方に混ざっていった

「じゃあ、女子が入るのを待っている間僕たちは何をする？」

「なんか、げーむでもするか・・・」

「じゃあトランプなんてどう？」

「おっ、さては明久、前に賭けで負けたこと根に持っているな」

「今回は、財布も少し余裕があるからね。今回は絶対負けないよ」

「じゃあ、なににするんだ？」

「ポーカーかダウトだな」

「じゃあ前回はダウトだったんだから今回はポーカーで」

さあ、これから勉強会だ（後書き）

今回はトランプゲームの開幕。そして夜は・・・
というわけで、また次回にお会いしましょう

ポーカー

「じゃあ、まずはルールの確認だ。俺たちに賭け金は無い。その代りに10枚のコインを渡す。

一勝負につき1枚。連続で降りることは禁止、交換は一度まで、負けた者はマクドのセットをおごりでいいな?」

前のダウトの時にはひどい目にあつたからね。あの子の苦痛の日々を思い出すと今でも泣けてくるよ。

みんな僕が負けで決定のような顔をしているけど、今日の僕はそうはいかないよ。なんせ今日のために鏡をみて

ポーカーフェイスの練習をしてきたのだから。今日はその実力の発揮時だ。

「じゃあ。カードを配るぞ」

三回ほどくつた後雄二がそれぞれに一枚ずつカードを渡していく。

これでまず全員カードが固まっているなんてことは無い

これじゃ、僕に勝てと言っているようなものじゃないか。

えーっと僕に回ってきたカードは、10、J、2、8、Kか・・・

ただしすべてハートマーク。フラッシュだ。さっそく運は

僕に向いているようだ。

「それじゃあ、交換だ。それぞれしたいカードを真ん中において山から新たにカードをひいてくれ」

しかし、その掛け声に応じた者はいなかった。みんな最初のカードがいいんだろうか?

まあ、僕が負けることはまずないだろう。だとすると僕がしなけれ

ばいけないのは敗者の顔。ここでまずいと思わせるような顔をすれば間違いなく皆勝てると踏んで勝負をしてくるはず……

「じゃあ交換の時間は終わりだ。」

その言葉を合図に僕は精いっぱいしまったという顔を演じて見せた。これで完璧だ。皆勝負を仕掛けてくるはず……

しかし、皆は僕の思惑とは180度違った答えを返してきた。

「俺は降りる」

「俺もだ」

「……右に同じ」

「じゃあ、今回はドロってことで」

「なんでえ？どうしてみんな降りるのさ。こんなに僕が困った顔をしてるんだよ？普通勝負しにくるでしょ」

「カードも変えずにあんな顔したら、演技だってだれにだってわかるだろう？それだからお前はバカなんだよ。」

「ちなみにみんな、手持ちのカードはなんだ？俺は2ペアだったんだが」

「俺は、ブタだ。もともと今回は勝負する気はなかったしな」

「……ストレート」

くそ、皆僕よりも弱い、そして湊を除けば結構強い。ムツツリーニ

なんて勝負にでもいいような手持ちだ。

そこまで僕って運がいい時は強そうに見えるのかな？

「それで、明久は？」

「フラッシュだよ。」

「やっぱりな。その辺りだと思ったぜ。お前が何も交換しないなんてある程度は強いんだろうと見当がつく。それにあの演技がかった顔。バカな明久にしては考えたが状態が状態だったからな。ざんねんだったな明久。それじゃあ次を始めるぞ」

そういつて、雄二はもう一度はじめと同じようにくみなおしてから、皆に配っていく。こりゃ下手にポーカーフェイスをつかえないな。

「ついでに明久。お前のはポーカーフェイスでもなんでもねえよ。ただの演技だ。それじゃあみんなカードを見てくれ」

しばらくたって、今のところコインの枚数は僕が4枚、雄二が3枚、ムツリーニが8枚そして湊が、25枚だ。
湊強すぎ。なんでそんなに強いのか？

「おまえら、俺の表情に惑わされすぎだ。そんなに敵の大将にかてんのか？」

ぐう 言い返す言葉無い。

「それじゃあ、カードをオープン……」

「何してんのアンタたち」

この声は美波か、風呂からもう上がってきたんだ。ってことは今は
 いったい何時？

そう思って時計を見るともう9時になっていた。

もうそんな時間か。　　つつい熱心にやってたせいで時間を忘れちゃ
つてたよ

「おい、島田。俺と変わらないか？そろそろ飽きてきたんだ。」

まあ、これだけ簡単に勝てるんなら、飽きてもしかたないよね。まあこれだけコインがあるんだし美波が負けることはないだろうし、別に入ってもいいかな

「だから、なにをやってるのって聞いているの」

「ポーカーだよ、美波。」

「そうだ、これに勝った者は負けたものに一つだけ命令できるって
いうな」

「なっ！」

「へえ、命令、ね。じゃあちよつとやってみようかな？」

「
・
・
・
私も頑張る」

「なっ！翔子。いつの間に。おい湊」

「じゃあ、俺はぬ・りひよんの孫でも読んでくるわ。がんばれ」

湊、少年ジャ・プ好きだなあ。じゃなかった。これはまずいことになった。

この状況、たぶん一番有利なのは美波。霧島さんも力は未知数だ。どうにかして僕たちが勝たないと、非常にまずい。美波が隅の方で「これで勝ったらアキはうちのサンドバック」なんてことをのたまっておられるのを聞いてしまった。

これは、もうデスゲームだ。負け＝死の世界。現にムツツリー二は・くつ、なんてむごい。体全体が血まみれじゃないかっ！（主に鼻血で）

「そ、それじゃあカードをくばる」

明らかに雄二もこのゲームがデスゲームであることを悟ったようで、やたらとびくびくしている。

僕に回ってきたカードは5、6、7、8、QマークはQだけがクロバー。ほかは全部スピード。交換ですべてが決まる。

もし、スピードの4か9が来ればストレートフラッシュ。これに勝てるものはまあないだろう。ただし、もしそれが引けなかったとしたら、僕の負けだ。あいにく前回に降りているから今回は降りることもできない。

頼む、来てくれ。4か9。

よしっ！来たのはスピードの4。これはもらった。問題はここからだ。さっきの時はあっさりボーカルフフェイスと僕の演技を見破られてしまったが、今回はそうはならないはず。精いっぱい最悪という顔を表現するんだっ！

そうすると、僕の顔でかどうかはわからないけど皆勝負に乗ってき
てくれた。これでどうにか7枚。助かる。そして雄二は二枚となり
沈没だ。さらば雄二。安らかに眠るがいい。

「それじゃあ、オープン」

雄二 フラッシュ

霧島 4カード

僕 ストレートフラッシュ

よし、このままなら勝てるっ！ただ霧島さんの手には驚いた。まさ
か4カードもそろっていたなんて・・・
雄二もまさかこんなにハイレベルな戦いになるなんて思っていなか
ったらしく、かなり呆氣にとられている
そして最後、美波の手札がオープンされる

島田 ロイヤルストレートフラッシュ

「「な、なんだってえ〜」」

「え、これ勝ちなの？霧島さんの方がすごいんじゃないの？」

まさか、ロイヤルストレートフラッシュをこんなゲームで拝むこと
ができるなんて、いやこんなゲームじゃないか

もう一人死人がでているデスゲームなんだ、このレベルは当然なん
だ。すごい、すごすぎる

それにしても、美波、その戸惑った姿、かわいいなあ」

「もしかして美波、ポーカーのルール知らないの？」

「う、うん実は」

ポーカーを知らなくて、これをだせるなんてすごすぎる。というより知らないからだせたのかもしれない

となると一番の強敵は、霧島さんではなく美波。くっ、死期が一刻と迫っているを感じる。それに美波は

湊の後だからもとのハンデが大きすぎる。ここまでか・・・

これで、僕のコインは3枚雄二は2枚霧島さんも7枚そして美波が28枚か・・・まずは雄二を復活させないと一人でも

0枚になつてしまえば終わりだ。こんな圧倒的な差では・・・もう裏の手に出るしかないっ！

僕は、この世界で洗練されたFクラス意思疎通術を使って雄二に僕の裏の手を伝えた。雄二もその作戦に応じてくれるようだ。これで僕たちの勝ちだ。死の危険からは免れられる。そう思った矢先に霧島さんが雄二の手を止める。

「・・・雄二、ずるはいけない」

なにっ！？どうして雄二のずるがばれたんだ。さすが霧島さん。僕は君のことを

甘く見ていたよ。だが僕はさらに君の一步先に行く。

「じゃあ、僕がトランプを組むよ。なんか雄二は卑怯なことをしてみたいだしね」

そうして僕は、僕専用インチキトランプを取り出す。このトランプ

には、僕にしかわからない暗号が一つ一つかかれていて、僕にしかわからないようになっていく。ふふふ、完璧だ。これで僕は死なずに済む。

そこからは。もうとんぱ子で、僕が圧勝していき、最終的には、雄二が0枚になって終わった。

「じゃあ、雄二。よろしくね」

「明久てめえ、よくも裏切り、ふぐう」

「何のことかな？意味が分からないよ。それじゃあ、ムツツリー二の輸血も終わったことだし僕たちも風呂に入るよ
女の子たちは、リビングで好きにしてくれ」

ポーカ―（後書き）

さてさて、次はお楽しみのおねんタイムですね。どんな過ちを犯してしまうのでしょうか？w島田のいちやラブを書きたいのに、ほかに書くことが多すぎておっつかない。次こそは、書いてみせるぞ、ホトトギス

夜のひと時

僕たちは、女子をリビングへ残して風呂場であることについて、話し合っていた。

「ムツツリー二はやめておく方がいいな、多分死ぬ」

「・・・そんなことはない」

「じゃあ、いくか？」

「・・・ブンブンブン」

「やっぱり無理なんじゃねーか」

「じゃあ、雄二がいけばいいじゃない。霧島さんとちょうどいいじゃないか」

「それだったら、明久の方がいいだろう。お前らは付き合っているわけだしな。ここは家主である明久を尊重してだな」

「そんなことしなくてもいいよ。雄二がいきなつて」

「やめろ、そんなことしたら俺は間違いなく婚約だ。そんな事態だけは避けたい」

「じゃあ、秀吉とにする？」

「そうしたらそうしたで、殺される。だからお前が行くのが一番無

難なんだ」

僕たちは今、全裸で今日の夜誰が女子と一夜を過ごすかを話し合っていた。僕の家はなぜだかとても狭く、部屋が2部屋

しかない。そのうえゲーム機やらマンガやらで、埋め尽くされてしまい一部屋が滅の状態。リビングを使ったとしても、7人もいるこの状態では狭い。で、最初は女子と男子に分けようということになったのだが、4人も寝られる場所はどこにもなかったため、誰か一人は女子と一緒に寝るという状態になったわけだ。Fクラス連中であればとんできたのだろうが、

今いるのは、婚約者付きの男に、むつつりスケベ、そして僕という至って真面目な人間ばかりだったので、こうして譲り合いが展開されているわけだけど・・・

「僕は、いやだよ。だってそんなことになったら・・・ね、ねむれないじゃないか」

緊張して・・・

「・・・ブッシャ~~~~」

「まさか、明久がそこまで考えていたとは・・・。軽い気持ちでふつてすまなかった。」

え？なに、僕なんか変なこと言った？

そこに、今まで口を一切はさんでいなかった、湊がある提案をしてきた。

「全員くじびきにしないか？その方が楽だし、あ、でもムツツリー二だけは残念だけど俺が見つけれ地下室でねてもらう。死なれちゃ

たまったもんじゃないからね」

「なんなの、その地下室って」

「あれ？明久気づいてなかったのか、まああれはきづかねーわな。入口も隠し扉っぽくなってたし、でもざんねんだがその地下室はひとり専用ルームだ。大勢はねられねーよ」

あゝ、どうせだったらそこに2人くらい入ってもらえれば、普通に男子と女子で分けることができたのに。

「じゃあ、くじ作ってくるわ」

そういつて湊は風呂場を後にした。いまおもったけど、この風呂場でかいな・・・

でも女子がこの案に納得してくれるかどうか、いやがるだろうか・・・

・

「というわけで、くじを引いてもらいたいと思います」

「べ、別にウチはアキになりたいなんておもってないんだからね。」

「・・・雄二は、私のもの」

「ワシはこのまま女子扱いされ、女子と一緒にねむらされるかと思っておったが、なんとうれしいことじゃ」

意外にも皆張り切っていた。美波は僕にさりげなくひどい一撃を浴びせてきたが、まあ僕も風呂場では、一緒になりたくないといったのでおあいこだろう。僕はいつたいだれとなるのかな？少しドキドキする。なんかこういうのって、無性にたのしい、僕はだれとになるんだろう。みんなが湊が作ったくじ引き箱からくじを取り出す。

えーっと僕の番号はα。これってなんてよむんだっけ。まあなんでもいいや

「みんなひいたな、これからマークの名前をいうから、そのマークとおなじやつが同じ部屋な」

なんだとっ！。これはやばい。確実にバカにされてしまう。まさかこういう形の公開になるとは、てつきりゝなんばんだったゝゝ僕はαだったよゝてきなノリで行けると思っていたのに。畜生。まさかこれも湊のさくりやくかつ！

「じゃあ、っていつても2つしかないんだけどな。最初はくだったやつ」

そうすると、僕と美波以外は全員手を挙げた。あれってことは僕もこれなのかな？いやでもなあどうしたものか

「じゃあこの全員はこっちへ」

そういったあと僕の目の前で、湊による素晴らしいマジックしょうを披露するかのごとく、一礼したあと僕の部屋にがつつりと穴をあけてくれた。えゝちよっと何してくれるの、っていうかなにしたの。

「きにするな、明久。全員が向こうに言ったら、これは自然消滅するぞ」

そうして、美波以外の皆が向こうに言ったところで僕はようやく事態に気付いた。どうやら僕は今日美波と二人きりというわけだ。なんか緊張してきた

「じ、じゃあ寝よっか。ちょうど二部屋あるから別々で」

「う、うん」

ね、ねむれない。やっぱりすぐ隣の部屋にいると思うとどうしてもつらいなあ

それに、なんだか外がうるさい。窓のそばによってカーテンを開いてみると、ザーザーと雨が降っていた。

と、その時、

ゴロゴロ

まったく、こんな時間にいい迷惑だ。もっともこんなのでビビるよ
うな人もまあいないだろうけど・・・と、次の瞬間、僕の部屋の扉
が開いた。開けたのは、美波だ。

美波は、まるで何かにおびえるように、でもこっちには入ってきにくい
ようで、そこに立ち止まっていた。

「美波？」

どうしたんだろう？ なにかすごくこっちに来にくそうだし、それに
妙に震えている。もしかして、トイレ、かな

どこにあるのか聞きづらいのかな？そんな遠慮することないのに。よし、ここは僕が先にトイレに行くことで場所をおしえてあげることしよう

そう思つて立ち上がったとき

ゴロゴロ

「きゃっ」

美波はともかわいらしい悲鳴とともに廊下でへたり込んでしまった。どうやら、トイレに行きたくてここに来たのではなく雷のことが怖かつたらしい。

うーん、でもどうしたものか。別に一緒にねてもいいんだけど・・・なんというか、それはしてはいけないというか・・・うーん、悩んでいると、美波が意を決したようにこっちによつてきて

「アキ、別に嫌ならいいのよ、ただ、もし嫌じゃなかったらそのソファでいいからうちも・・・」

「うん、別に美波がいいなら僕は全然かまわないよ。」

「ありがとう、アキ」

あゝ美波のその喜ぶ顔かわいいなあ。抱きしめたい。けどこれをすると犯罪だからしないけど

ゴロゴロ

「きゃっ」

ふおおおおおお。これは、なんというか美波大胆。今の姿勢を

説明すると、美波が僕のことを押し倒しているという状態だ。

「あ、ごめん」

あ、残念ながら夢の状態はあっさりとなくなってしまったが、何とも今日はいい体験をさせてもらった。感謝感謝

「いや、別に大丈夫だけど。美波ってそんなに雷怖いの？」

「べ、別に怖いってわけじゃないのよ。ただ大きい音が嫌いなだけ。それだけの」

「へえ、そうなんだ」

「そうなのよ、それよりアキ。ゲームセンターって興味ある？」

「興味っていうか、僕しょっちゅう言ってるよ。なんで？」

「えーっとその、うちもいつてみたいな〜と思って。ダメ、かな」

おっとこんなところで美波からのお誘いだ。これを断っては男がすたる。

「いいよ、っていうか行かせてください。」

「じゃあ、勉強会の最後の日に行きましょう。二人きりで」

「うん、雷もやんだみたいだし、そろそろ寝よっか。明日も頑張らなきゃならないしね。」

「そうね、じゃあ、お休み」

「うん、お休み」

こうして、楽しい夜の時間は過ぎて行った。

夜のひと時（後書き）

だめだ。ぜんぜんいちゃいちゃかけなかった。うーん勉強不足だな。
また出直してくるッすw

もう一方では・・・

雄二 side

明久のやつのことを考えて（面白そう）あの場では、湊に従ったが、
いったいどこに連れて行くってんだ？

「なあ、湊。俺たちをどこに連れて行くってんだ？」

「まあ、もうちょっとでつくから、待ってろって」

もともと、明久の家に変な穴をあけた時点から異常ではあったんだ
が、本当にこいつは何者なんだ？

Fクラスではあるが、当然俺より学力は上。そのうえあの翔子たち
をあっさりやったZクラスとも互角。いったいどうなってるんだ。
あー畜生だんだん話がこじれてわからなくなってきた。

「・・・雄二、どうしたの？」

「なんでもねえよ」

「・・・うそ、絶対何か隠してる」

隠してるってわけでもないんだが・・・ただ頭で整理がつかないだ
けで

「別になんでもねえよ、ほっとけ。それより翔子、あのZクラスに
負けた敗因は何だと思っ？」

学年主席チームであの様なんで考えたくもなかったが、事実あつち
まったもんはしょうがねえ。だとすると勝負したこいつらがなにか
弱点でも知っていてくれたら・・・

「・・・普通に実力が私たちより上だっただけ。あの人たち、ほぼ
全教科600点前後とつてみたい。それに、私たち、苦手教科ばかり
で勝負を挑まれた。人員配分がまるでわかったようにそこに苦手
教科の先生がいて、手も足も出なかった。」

「そうか・・・」

不味いな、それじゃ弱点は見つけられなかったに等しい。一つわか
ったのは、今回の勝負下手に作戦を考えるよりも、自分たちの意思
で行動させる方が確実だということ。あのバカども（クラスメイト）
のことだ。Zクラスの誰かを適当な奴と付き合つてるというデマを
流せば、何も言わずとも自分の意思で行動して、殺しに行くだろう。
あいつらがばかでよかった・・・。だがそれでやつと互角という状
態に対して、向こうは点数がある。こっちにはない

あつたとしてもムツツリー二の保健体育、湊が互角に張り合えるぐ
らいだろう。となるとあとは先生か。バカどもがどれだけ役に立つ
かはわからんが、それでも先生がいなくて勝負できないという状況
を作り出せば一気にボス格にたどり着ける。となると・・・こ
こまで考えたところで湊の声「着いたよ」が聞こえたので一度思考
を中断した。

そこで、俺は啞然とした。

「やゝみんなどうしたの？こんなところに来るなんて。もしかして
敵情視察かな。」

そこにいたのは、紛うことなき我らの敵Zクラスの奴らだった。

「おい湊、これはどういう」

「今日さ、俺たち寝ることがないんだよね。だからここに俺たちここに泊まりたいな」と思って」

こいつ、俺のことはスルーしやがった。

「いいよいいよ、泊まっていきなよ。今夜は楽しくなりそうだ」

「くだらん、俺はもう自分の部屋にもどる」

そういつてすたすと自分の部屋に向かって歩いていくあの眼鏡をかけたクールな男、たしか・・・雪煉だったか？こいつはモテそうだな。だがこの性格じゃ信憑性にかけるなコイツはなしだな。

「あの子は人と群れることを嫌うから、許してね」

「いや、全然かまわないさ。それよりみんなでトランプでもしない？ダウトなんてどう？あいつらとやってても弱くってさあ」

「えゝそうなの？坂本君とか強そうなのに」

「いや、もう全然。あまりに差がついたから途中でほかの娘にあげちゃったよ」

「へえ、そうなんだ。よしじゃあやろうかポダウト。ねえ皆、ダウトやらない？」

いつの間にか湊はZクラス代表と打ち解けていて、ダウトをするこ

とになったらしくそのZクラス代表くろみやの掛け声に合わせてZクラスの連中が集まってきた。

「私はやつてもいいよぉ」

「めんどくせえから俺はパス」

「そんなこと言うとお、さわっちゃうよぉ」

「ば、ばかよせ、わかったやる、やるから」

「わかればよろしいのにゃ」

あの二人は確か、空星と村上か・・・あれは使えるな。とりあえず仲良くしてる動画を確保した。これでバカどもの首尾はばっちりだな。

「どれ、ワシも参加しようかのう」

「それじゃあ、ワシも参加するとうかのう」

「マネはやめてほしいのじゃ」

「マネなんてしてないのじゃ」

「うーん、困った娘なのじゃ」

「困った男の娘なのじゃ」

あそこで、秀吉と同じしゃべりかたで遊んでいるのは、十六夜って

やつか。あいつあんなしゃべり方だったか？

「・・・雄二、私たちも参加しよ」

「そうだな、湊に言われっぱなしっていうのは癪だしな」

こうして、ダウトの幕が開けた

ついに見つけた、勝利の道（前書き）

というわけで、流れで更新といこうじゃないか
一度パソコンを開けてしまうと止められないです
ただ、しばらく更新をしていなかったなので、レベルが落ちている気が・・・

ついに見つけた、勝利の道

勝負はあまりに一方的なものだった。

俺はもちろんのこと、翔子、秀吉、そしてなんとZクラスのほかのメンバーも圧倒されていた。

おいおい、湊が異常なことはわかっていたがここまでだったとは・

この二人はもしかしたら人の心情でも読めるのではないかと思うほどの確にうそを見抜いている。

そして、今場に10枚のカードが出た時点で俺に番が回ってきたのだが、不幸にも俺の手札に次に出すカードである

3はどこにもない。やべえなあゝ

俺はできる限り平静を装って「3」といって手札に二枚あった」を出した。

すると、さも当然のごとく湊に「ダウト」と言われてしまった。

こいつ、やっぱりインチキしてんじゃないかねえか？

「おいおい、坂本。人をインチキ呼ばわりはひどいよ。俺だって頭を使って計算しているんだよ。な、黒宮さん」

「あはは、そうだね。ぼくたちは普通にすべてのカードを計算と推測しているんだよ。もうここまでくれば結構な確立で

ぼくはみんなの持っているカードを言うことができるよ。たぶん湊君もそうだよな？」

「ん、そうだな。ちょうどいいから坂本の手札を俺があててやろう」

「ちょ、やめろ。そんなされたら・・・」

こいつならマジでやりかねねえからおそろしい

「冗談だよ、そんなことできるわけないじゃん。坂本、お前バカだな」

「湊、てめえ」

「・・・雄二、かわいい」

「俺はどこも可愛くねえっ！」

「・・・照れないで」

「照れてねえっ！」

まったく、翔子もそうだが湊も湊だ。あんな確率で当ててたらいくらなんでも本当のことに聞こえてくるだろうがっ！

そうこうしている間に秀吉たちはちゃっかりと、自分の番を済ませ、次に湊に番が回ってきた。

「じゃあ、6」

すると、思いもよらぬことに、黒宮が湊にダウトを宣言してきたのだ。いままでなかったことで少々みんなも驚いているようだ。すると湊は飄々（ひょうひょう）とした様子で

「あちゃーばれちゃったか、俺、今回手持ちに6なんてなかったんだよね」

そういつて、場にあったカードをすべて回収していく。そして次の

番で黒宮があがり勝敗的には黒宮と湊が並んだ形となった。

「じゃあ、次でラストにしようか？そろそろぼく眠いし」

「わしもそろそろ、床に就きたいと思っておったところじゃ」

「むゝもう眠いからあたまはたらかにゃい」

「お前から無理矢理やらせておいてそりゃねーだろ、次でラストなんだから早くやるぞ、あゝ、めんどくせえ」

「じゃあ、配るよゝ」

黒宮がそついったその時

「今回さ、いったん坂本にもトランプくませてやってくれないかな」

湊め、また妙なことを・・・そついでさらに湊は俺の下までやってきて

（黒宮に一矢報いてみる）と言ってきた。その言葉の内容を知らないまわりの連中は

「なになに、もしかしてBL、BLってやつなの」

「・・・雄二は渡さない」

「ふおお、あかり一発でめがさめちゃったよ」

「さめるな、寝とけ。」

と騒ぎ立てていた。

それにしても、いかさまで黒宮に一矢報いる、か・・・その言葉を思い出し、ちらつと黒宮の方を見てみると、

口ではB L、B Lと騒ぎ立てているが、目線は真剣そのものとして俺の今くつているトランプに注がれていた。

おいおい、湊、俺はどうすれば・・・

途方に暮れていた矢先に俺の目の前に一つの光景が飛び込んだ。クール眼鏡の雪煉が部屋から出てきて、何やら俺に

アイコンタクトを送ってきている

これは、なんとそのアイコンタクトはFクラスで用いられている極意の一つだった。ないようによると

（トランプだけをみているぞ）それだけだった。

俺は、あいつのいうその言葉の意味を考えてみた。

トランプだけを見ているぞ、トランプだけ、つまり周りは見えていないということ、まわりを見えていないことは、まわりで何をしようとも気づかない。だがそれをどう使えばいいんだ？そもそも俺はそんなにトランプをしない、いや、するが、相手は明久やムッツリーニ、秀吉だけだ。そんなことをするために普段頭はつかわねえから

・・・っ！

そうか、そういうことか。なんだ簡単なことだったんじゃないかトランプだけを見ているぞ、それはつまり俺が反則をするという可能性もしくはなにか仕掛けてくることを警戒しているんだ。そもそも湊は一矢報いるとしかいってねえ、勝てなんてことは一言も言っていない。つまり、小細工なしの真剣勝負で行けばいいってことだっ！

そのあと、あっさりと俺は敗北し、湊が勝利を収めた・・・

皆が寝入ったところ、俺はトイレに行きたくなって目覚め、トイレへと向かおうとしていた。

すると、そこには二人の男が立っていた。湊と雪煉だ。そう思っていたのだが

「おそかったな、てっきり気づいてないのかとおもったよ」

「うちがうちのそんざいにきーつかへんわけないやろ」

ん？なんだか聞きなれた関西弁が・・・

「もしかして、その顔キーついてへんかったん？わかってくれるもんやおもつてのに、ひどいわ、坂本君」

「そりゃ、あれだけ完璧な変装してたらわからねーよな」

「そっいつ湊君はわかってたやん」

「まあ、俺はな」

「すまん、いまいち、話がつかめないんだが・・・どうして春風がここに？」

グッバイ、Zクラス校舎（前書き）

祝日なので、PCオープンの許可が下りました。よって更新したい
と思います。

グッバイ、Zクラス校舎

「うちはな、あの日以来、ずっと勉強し続けてきたんや。当然Zクラスに勝つために。あれはつらい修行やった、毎日毎日開けても暮れても勉強、さらにはだれにもばれんようこつそりこの学園に侵入して召喚獣の操作訓練あとはなあ・・・」

「そのことなんだが・・・」

まずい、Aクラスをけしかけて負けたから、春風はもう戦えない、なんて言えねえ、しかもそれが俺のせいならなおのことだ。あんなでトイレに行きたくなつたんだよ俺はそんなことで頭を悩ませていた時、湊が口を開いた。

「春風さん、君はもうこの戦争に参加することはできない。」

おーい、直球だな。あの訓練の日々の話聞かされてよくそんな直球に言えるな、ある意味尊敬するぜ

「な、なんやて・・・どういうことなんや」

そりゃそうなるよな。

「簡単だ、そこにいる坂本が、Aクラスをおとりに使っただけの話だよ」

はっは、そう来たか、あくまで狙いは俺ってわけか……。いいだろう、俺もかつては神童と呼ばれた男、巧みに言葉を使って、春風を説得して見せよう・・・

「はあゝあこんな形で修行の成果を発揮することになるなんてな。坂本君あんたホンマに・・・去ねや」

やつべゝこりやマジだ。というよりもう聞く耳をもつてね・・・つておい、なんてもんもつてんだよ、チェインソーって修行関係ないだろ、つてつっこんでるばあいじゃねえ、このままじゃ確実に死ぬ。こうなれば、中学の頃神童の名をすて、悪鬼羅刹に名をはせたところに血を呼び戻すしかねえ

「坂本お前・・・どんだけ自分都合いいんだよ、説得の時は神童、暴力になれば悪鬼羅刹って・・・」

心底湊が、俺の都合のいい脳にあきれているようだが、そんな事を気にしている余裕はねえ。

俺は、春風が修行の成果が何かしらねえがありえねえスピードで走ってくるのに逃げることで精一杯だった。

しかも、走っている間もあいつはチェインソーをブンブンと振り回している。

「しぶといでホンマに」

しぶとくなきゃいきられねえからなっ！

だんだん体力もなくなってきたのか、春風のスピードが落ちてきた。俺はその隙を狙って一瞬にして方向を変え、春風の方に変えた。多分今なら単調に上から振りかぶるはず、その大きな動作によって生じる隙をつくしかねえ。悪いがかつこ悪くこけてもらうぜ。

「まんまと引つかかったな。こんな安い手もう引つかかるやつなんておらんと思つてたけど使ってみるもんやな」

ちっ！やられた。スピードを落としたのも肩で息をしているのも全部演技かつ！万事休すか・・・

そう思った時

「もうその辺にしときなよ、戦争に参加はできないけど、後ろからの手助け程度ならできるからさ、それでもいいだろ？」

春風さん」

「え？そうなん、もう勘違いしてもうたやんか。湊君意地悪やわ。ごめんな坂本君、うちも本気で殺るきやなかってんで？」

どの口がその言葉をいうか、演技してまで殺そうとしていたくせに、こいつはFクラスと違って賢いから性質が悪いな
今後、こいつだけは敵に回さないよう最善を尽くそう

「それで、春風はどうしてそんな恰好をしているんだ？まさか・・・

」

その手に持っている物騒なもので雪煉を・・・

「違う、違う、別に雪煉くん殺したわけやないから。ゆうてるやん、別にウチひところそうなんておもてへんから」

じゃあ、さっきの殺気はどう説明いただけるんだろうか？とまたつつかかると怒られそうなのでやめておく

「ゆうてるやん、修行を無事に終えたから来ただけや。そこでたまおもろいことやってるのをみたら部屋でその・・・雪煉くん？がねとったから変装してさんかしたくなってやな」

「まあ、そろそろ遊びも終わったことだし、Zクラス討伐クエストの完遂と行こうか。ここに明久がいるともとZクラス勢揃いだっただけ、あいにく島田がね・・・いい夜すごしてるかなあいつ」

いい夜なんて過ごしていたらぶつ殺してやる。明日あいつらが起きる前に帰ってやるか。なんならそこでおきなくしてやっても問題ないな。

「黒いオーラがでてるぞ、坂本。じゃあ討伐するZクラスだが、どうする？」

「それやったらうちに一つ作戦があるで」

「おお、そりゃいいな。で、どんな作戦だ？」

「簡単な話や、湊君と黒宮さんがレベルなら湊くんVS黒宮さんのバトルフィールドをつくればいいんやろ？やったらまずは揺動や、それも相手の気づくような揺動、つまり湊くんをそこにださんと派手な動きで相手を混乱させるんや。当然あの黒宮さんはそれわからはるやろつな、単なる揺動やつて。湊君と自分をさして戦わせるためのおとりやつて。やけど層やないねん、実はそれが本物。その中に土屋くんをまぜとくんや。そして西村先生を誘導してもらう。それは明久くんの役目や。多分何もせえへんかて、あの子なら何らかの形で戦争から遠ざけることぐらいできるやろ。それで湊君にはそれが揺動っぽく見せるために、黒宮さんとこに向かってもらう。で黒宮さんと戦うとみせかけて近衛隊の排除。こんなもんでどうやるか？」

完璧な作戦だ、これを成功させられれば多分かつことだってできるだろう。だが

「「これでは勝てないっ！」「」

「お、坂本、意見が一致したな」

「やっぱりお前もそう思うか、湊」

「なんでなん、完璧やん、これで勝てへんことなんてあらへんて」

まあ、確かに完璧だ。だが春風は

「お前は黒宮のことを甘く見すぎだ。」

揺動だけであいつがビビるわけがねえ、揺動だってわかっていたところでは必ずさらに裏の作戦までよんだ行動に出るはず
今回のダウトで学んだ、春風の作戦に足りないもの

「相手の作戦をまるで無視している。相手が何を仕掛けてくるかを考慮していない。だからこの作戦は成功しない。

多分黒宮はこちらのありとあらゆる手段を読みの範疇に加えてつぶしにかかる。この作戦だったらたつた一つ、誰かを戦死させるだけで鉄人をムツッリー二戦のときに間に合わせなくすることは簡単だ。大島先生はあいにく今は出張中。だからムツッリー二を作戦の要とするのはあまりにリスクが高いし、相手の考えないようなことな
いとだめなんだ。」

そう、ダウトで学んだのは相手の心理を読むこと。

「お、坂本、ちょっと賢くなったな。そして今日、ダウトで分かっただろ？黒宮の狡猾さは」

やっぱりそういうことか、すべて俺に理解させるためにダウトをして、一矢報いるなんて言って。

ただもんじゃねえなコイツは。だが、まだ俺にも黒宮の考えもつかないような作戦なんておもいついてねえ。

春風の作戦をだめだしたが、おれもその程度の作戦しかかんがえつかねえんだよな、実際は・・・

「もう１ステップ必要みたいだな、じゃあ帰るか明久の部屋に」

「いいのか、秀吉とか置き去りにして」

「置き去りにしなきゃならないんだよ。春風さんはここで待機でいいかな？」

「もう、いいもん。どうせうち役に立たへんかったし。修行したってこの程度やったし・・・」

すごい、いじけてるな・・・

「いや、春風さんは多分坂本に大きなヒントを与えたと思うよ。俺でも考え付かなかったことをね」

「えっ！？ほんまに？」

「ほんと、ほんと。ん？やっぱり春風さんも俺たちと一緒にについてきてもらおうか？ちょっといいこと思いついたから」

「「いいこと?。」」

「いや、いいこと、じゃないかな?でも必ずちからになることだと思っから、でもここでそれを言っちゃうと黒宮さんが聞き耳たてたりしてるからね、ね黒宮さん」

「あはは、やつぱりばれちゃったか、それにしてもひどいな、狡猾だなんて。べつにぼくは普通だよ?じゃあかえるんだね、楽しい作戦をまってるよ」

「ああ、楽しみに待っててくれ、次が本当の最終決戦だからな、これに勝てば俺たちの勝ち。負ければ3か月間の試召戦争の禁止でZクラスの勝ち。本当はおれも傍観者がよかったんだが、ちよつと黒宮があまりにも強そうだったんでつい」

「うれしいね。そんなこと君に行ってもらえるなんて」

「それじゃ」

「うん、じゃあね」

そして、俺たちは明久の家へと戻っていった

さあ、遊ぼうっ！

行った時と同様、湊はZクラスの校舎に大きな黒い穴をあけた。

さすがの黒宮もこれには口をパクパクさせながら、「なにっ！？何をしたの！？」と驚きを隠せない様子だった。

来たものの、俺でも不思議だ……。どうやったらZクラスの校舎と明久の家がつながるんだか……

しばらく歩き、ようやく出口が見えてきた。さてさて……

「なあ春風、お前さっき持ってたチェーンソーまだ持ってるか？」

「え？ああ、うんもってるで、そんなん当たり前やん」

当たり前なのか……

「それ、ちよつとの間俺に貸してもらえねえか」

「別にええけど、なんでなん？うちが言うのもなんやけどこんな使い道ないで」

実際に言えばお前と持つ理由は同じなんだがなっ！それを言っしまつと当然貸してはもらえなさそうなので、ごく自然な流れで嘘を並べることにした。

「おいおい、春風。チェーンソーっていうのはもともと何のためのものかしってるよな？」

まさか、ひとをころすための道具なんて言うはずがないだろうし、そう信じている

「そんなん、人をころ・・・ちがうちがう。木を伐採したりするするためのもんやろ」

セーフだ、セーフ。言いかけたところでとまったからセーフだな、これは。

「その通りだ。俺は、歩いている間にいろいろ考えたんだが、明久の家にもう一つくらい勉強部屋があってもいいと思わないか？できるなら今後あのクラスにも近づきたくないから全員分の寝室も用意したい。その時にお前のチェーンソーが必要なんだ。」

ま、当然嘘だになっ

「なるほどな。さすが坂本君。頭回るなあ。」

湊は俺の嘘には気づいていたようで、やれやれといった様子で「ほどほどにな」とだけ言って先を歩いた。

ちょうど、この交渉が成立したと同時に出口が見えてきた。

そろそろか・・・

「ほな、坂本君。これ」

そういつて春風は、どこに持っていたのだろうかさっぱりわからな
いがチェーンソーを俺に渡してくれた。
結構重いなこれ

「サンキュ」

「you”re welcome」

きれいな発音で英語で返事を返してくれた。なんていい発音なんだ、こりゃ外国人並みだな。

そして、明久家につき、明久の寝室に行ったとき俺は誓った。

こいつは……リア充はすべて殺そう

明久SIDE

んん〜なんだかきゅうにうるさくなつたなあ、がたがたという足音、シャカシャカとなるズボンのこすれ合う音。それに

ブーンブーン、どこかでバイクが走りまわっているのかそんな音まで聞こえてくる。

僕はまだ眠い目をこすりながらゆっくりと目を開けた。

すると、目の前に広がったのはとんでもない二つの光景だった。一つは僕の隣に美波にくっつくように寝ていたこと

すやすやと眠っているその姿はいつも吊り上った目の強気な彼女とはまた違った、妖精のようなかわいらしさだった。

もう一つは、目の前にいる男、坂本雄二の持つチェーンソーだった。あのブーンブーンという音はどうやらこの音だったらしい。まったくはた迷惑な奴だ。そんな雄二に僕はかりつけるような口調で言った

「もう夜なんだから、そんな音ならしちやいけないでしょ、雄二」

すると雄二は無言で僕にその音のなる凶器を振りかざして……
ってちよつと待って、タイム、タイム

僕の思いは通じず、振り落とされたチェーンソーを間一髪のところ
で僕は白羽どりをして、一命を取り留めた。

が、雄二の猛攻は止まらなかった。

白羽どりから、すぐに手前にチェーンソーをひき戻し、次は突きを
繰り出し、それもまた間一髪でよけると次は薙ぎ払いを繰り出して
きた。これはもうなんだか予想できていたので軽くよけることがで
きたがこの状態だと最後はあれが来る……。あれは正直よけられ
る気がしない。どうにかしてとめないと

「雄二、止まって、落ち着いて。これには深い事情があるんだって」

「リア充はころす、リア充はころす、リア充はころす……」

だめだ、たぶんこわれている。よほどこの光景に殺意を抱いたのだ
ろう。まあ僕が同じ光景をみてたら同じことをしただろうから雄二
を責められないんだけどね。周りに何か使えそうなものは無いかと
探している、入り口の方に最強の武器＋防御である湊と一人の女
性を発見した。よしあそこだ、あそこに逃げ込めばどうにかなる。
雄二は僕の予想通り、最後の特技、鬼神切り＋鬼神大回転切りを繰
り出してきたが、すべて湊によってガードされた。
何をしたのかは僕もはつきりわからなかったけど、どうにか助かつ
た……

「坂本、そろそろ落ち着け。」

「はっ！俺はいたい……」

湊の呼びかけでようやく意識が戻ったようだ。ふう、よかったよかった。

「どうだった、自分の思うがままに殺戮をするというのは、まあ実際は誰も殺しちゃいけないけど」

「これがお前の言うもう１ステップだったってわけだな、ようやく作戦が見えてきたぜ」

「ねえ、何の話をしているの？」

「Zクラスを倒すための作戦の話だ。まあお前には言ってもわからないだろうから、別にかまわないだろう？」

「まあ、じゃあ聞かないことにしておくよ。で、もう一つ、そこにいる女の子は誰？」

その質問をするや否や湊と雄二は大声を開けて笑いだし、その女の子は顔を真っ赤にしていた。

「しかたない、だって明久だもんな。許してやってくれ、は（・）る（・）か（・）ぜ（・）」

「ホンマに信じられへんわ、一年間おんなじくらすやったっていうのに」

その関西弁は・・・

「春風って渚さんっ!？」

「そうやけど、なんか文句あるん」

怒りに満ち溢れたような顔ですねた口調でそういう渚さん。なんかちょっと可愛い……

おっといかんいかん、僕にはもう、美波というガールフレンドがいるんだ、ほかの女の子にデレデレするなんてそんな

「明久、鼻の下伸びてんぞ」

その雄二の言葉で、今までけっしてどんな物音を立てても起きなかった美波が猛獣の形相で飛び上り「どういことなのかせつめいしてもらわよ、アキ」といって僕の首を締め上げた
く、苦しい……

「だいじょうぶだよ、この世で僕が一番好きなのは美波だけだから」
そういったとたん、美波は「ふえ」とかわいらしい声をあげて顔を真っ赤にした。

「もう、アキってば正直なんだから」

このやり取りをみていた湊が

「よせよせ、そろそろまた坂本が暴走するぞ」

と、ありがたい忠告をしてくれた。どうやら雄二は最近疲れ気味だから暴走しやすいのかな

とにかく、雄二の前でいちゃいちゃするのは避けよう

ようやく、みんなが落ちついて、雄二は僕たちにあしたからするこ

とを話した。

本当にかてるのか謎だったけど、自信に満ち溢れたあの姿には何とも言えない説得力があって、みんな一気に承諾した

でも、本当に勝てるんだろうか……

これから、一切の勉強はやめて遊び倒すなんて……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0438w/>

バカとテストとZクラス

2011年11月26日22時52分発行